

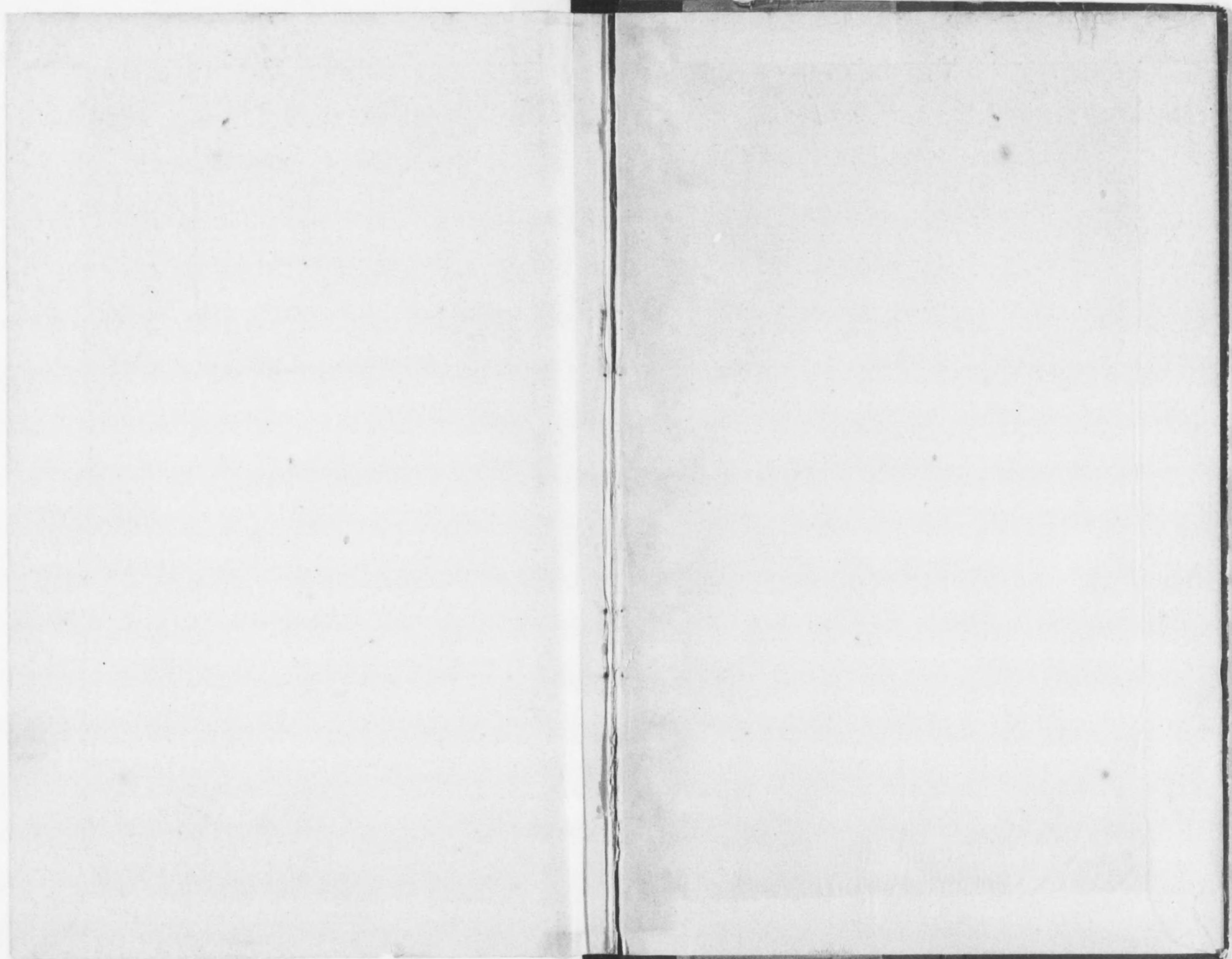
特277  
443

特277-443  
\*76W10382 \*



始





近代女子教育學



佐藤熊治郎  
中島義一  
共著



76W10382



### 本書の編纂に就いて

本書は高等女學校に於ける教育科の教科書として、文部省所定の教授要旨並に教授要目に準據して編纂したものであります。

私たちが常に不満に思つて居たことは、從來の高等女學校用教育教科書が、其の内容に於ても敘述方に於ても頗る物足らぬ節が多く、中には概念の羅列に終り、名辭の説明に止まつて居るものもあつてあります。

そこで私たちは兒童の人間としての發達に即して、兒童の本性と教育の意味とを総合的に觀、常に家庭教育の立場から眺めることによつて、從來の教科書の弊から逃れようと力めたのであります。しかも學習者の接し得る事實に材料を取り、之を敘述するには極めて平易な文章によつて、初學者にも大體の輪廓を容易に捕捉し得るやうに仕組んだ心算であります。

しかし事實と意味とを総合的に觀ると言ふことには、或種の混亂を伴ひがちでありまして、本書の敘述の上にも之が現れて居るやうであります。

が、此の缺陷は教授者各位の適切な取扱によつて遺憾なく補つて戴けるものと思ひます。勿論私たちも今後の修正を期して、一層當初の目的に添ふやうにしたいと考へて居ります。

尙本書は單に兒童の本性と教育の意味の解明に止まらず、之によつて人間の理想に對する考察、自己の精神状態の反省をなさしめ、女子としての教養を高め、同時に眞の母としての自覺を促さうとも考へたのであります。

最後に、本書は從來の教科書の型を破つて、一切の小見出しを省きました。之は學習者が自修や復習の際に、自ら綜合し統一すると言ふ自律的な態度を養成しようと思つたのと、讀書に就いての訓練を企圖した爲に外ならないのであります。幸に大方の叱正を切望して止まぬものであります。

昭和五年八月

著者識

## 近代女子教育學 目次

第一章 嬰兒期の生活	一
第一節 呱呱の聲	一
第二節 吸乳と睡眠	五
第三節 感覺と動作	一一
第四節 身體の發育	二四
第二章 幼稚期の活動	三
第一節 兒童の想像	三
第二節 物の人間化	二四
第三節 遊戲の生活	二六
目次	一

第四節 童話の世界……………三四

第三章 幼稚園の教育……………四一

第一節 幼稚園の誕生……………四二

第二節 保育の目的……………五二

第三節 保育の方法……………五五

第四章 幼年期の特徴……………六三

第一節 作戲の時代……………六三

第二節 子供の諄聞き……………六八

第三節 社會的生活……………七〇

第五章 小學校の教育……………七六

第一節 小學校の目的……………七六

第二節 學級の生活……………八二

第三節 學習と教授……………八五

第四節 少年期の精神……………八九

第五節 教科の性質……………九六

第六節 教授の方法……………一〇三

第七節 訓練の目的……………一〇七

第八節 意志の發達……………一一〇

第九節 訓練の個性……………一二四

第十節 身體の養護……………一二八

第十一節 卒業後の方針……………一二五

第六章 青年期の心理……………一三三

  第一節 精神の嵐……………一三三

  第二節 自己の發見……………一三六

第七章 社會教育の施設……………一四〇

第八章 母としての自覺……………一四七

# 近代女子教育學

## 第一章 嬰兒期の生活

### 第一節 呱呱の聲

母胎を離れた嬰兒が始めて擧げる産聲を、西洋では此の世に生れ得た歡喜の聲であると言ひ古して居るさうであるが、肉體を罪惡の府と觀る宗教的思想から言へば寧ろ悲哀の叫びとも考へられよう。伊太利の畫聖レオナルド・ダ・ヴィンチが、あの鐘の音を聽け、鐘は一つだが音はどうにでも聽かれる」と其の弟子たちに告げたと云ふが、産聲に就いても同様で、之を歡喜の聲と聽くか悲哀

の叫びと取るかは、此の世に於ける人間の生活——人生に對する觀方の相違に基く。人生に對して意味と價值とを見出すものには、此の世に生を享けたことが歡喜と考へられ、然らざるものには悲哀と觀られる。

人間は齊しく生きようとする願を有つて居る。しかし其れは他の動物のやうに單に自己の生命を維持し種族を保存すると言ふだけでなく、満足な豚となるよりも不満足な人間となる方が宜い、満足な痴人となるよりも不満足なソクラテースとなる方が望ましい。と言つた人もあるやうに、生き甲斐のある——意義あり價值ある生活をしたいと希ふであらう。其の爲に煩悶が起り苦惱が生れるかも知れない。さうしたものが生れ、ば生れるほど一層價值ある世界を待ち望むのが人情である。けれどもどうすれば

價值ある生活が營めよう。物は使はれて始めて價值があると言はれる。しかし人間は他の道具となつて満足して居るものではない。却つて自ら考へ自ら行ふところに言ひ知れぬ歡びを感じる。そして學問を建て、藝術を生み、道德を行ふと言ふやうに、人間特有の活動を續けて行くものである。しかも學問の價值は眞理の探究に、藝術の價值は美の表現に、道德の價值は善の實行にあるので、ピタゴラスの定理は實生活に應用されると否とに拘らず眞理であり、雪舟の繪畫は裝飾になると否とに拘らず美である。ワシントンの正直は、其の結果が彼に利益を齎す爲に善であるのではない。眞善美は其れ自身全き價值である。他に使はれて價值の生ずるものを實用價值又は經濟價值と呼ぶのに對して、其れ自身に價值のあるものを價值自體又は價值當體と名づける。人間



が自然的の生活から離れて精神生活をなすと言はれるのは、人間特有の素質に培つて、價值當體を其の生活の上に現し得るからで、こゝに人間特有の生き方がある。かく眞善美を實現するところの働きを文化と言ひ、其の結果たる學問・藝術・道德などを文化財と言ふ。従つて文化の實現は人間生活の目標であり理想でなければならぬ。「まさされる寶子にしかめやも」と古歌にもあるやうに、何にも増して愛する我が子を、愛する故に身を粉に碎いても立身させようとするのが、世の母親の常である。此の母親の心は、學者などがことやかましくあげつらふ理想をことさらに意識してではないが、しかも知らず識らず人間としての理想を追ふものと考へることが出来る。此の無意識的に動くものが、やがて愛となつて兒童の上に注がれるのである。

## 第二節 吸乳と睡眠

始めて舉げた呱呱の聲をどう観るかは、観る人の心々にあることであるが、事實は母胎から離れる際に受けた最初の刺戟に對する反射運動である。反射運動とは、外界の刺戟に對して機械的無意識的に反應する遺傳的の運動で、生後數日で現れる嘔や、七週乃至十一週で現れる瞬なども之に屬する。嬰兒の生活は殆ど反射運動や本能運動によるもので、此の點から觀ると、動物と何等擇ぶところがない。

殆ど意味をなさぬやうに見える初生兒の四肢の運動や啼泣は、身體内部の生理的變化が刺戟となつて起る反射運動の一種で、呼吸運動・心臓の鼓動・血管の收縮開張などと共に、特に自動運動と呼

んで居る。啼泣は、主として飢渴や倦怠や排泄物に因る不快や、其の他何らかの故障の起つたことなどを知らせるもので、無力な嬰兒の生活と其の發達の上から觀れば、頗る重要な意味を有つ表現運動である。しかも之は肺臓や喉頭の運動を反復させて、其の機能を高める練習運動ともなる。無意味に見える四肢の運動とも同様である。故に保育の任にある母親は、嬰兒の泣聲に依つて其の意味を察し、適宜の處置を採らねばならない。

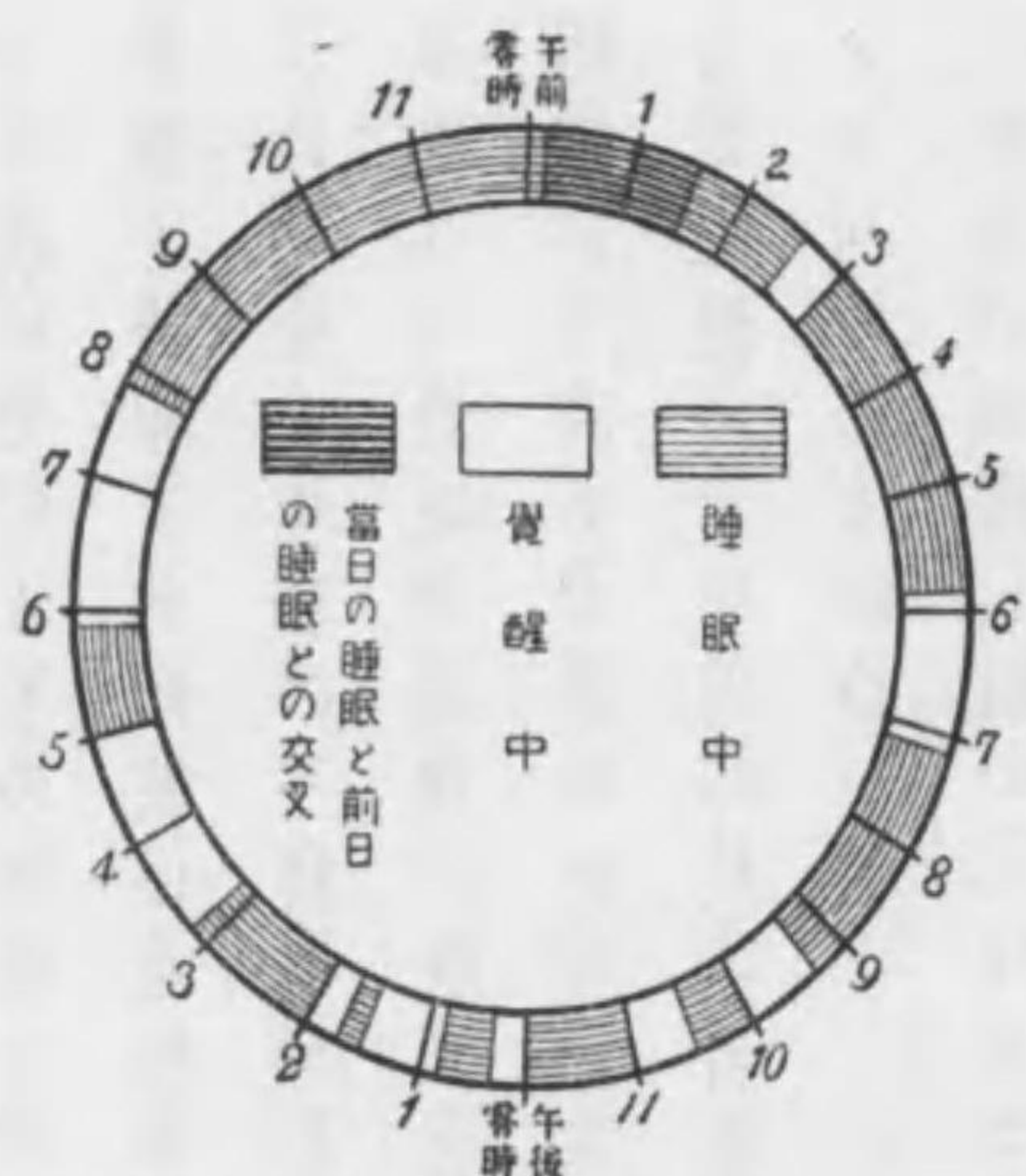
誕生と共に現れる活動は吸乳である。嬰兒は其の口に觸れるものがあれば、必ず之を吸はうとする。之も外界の刺戟に對して起る反動ではあるが、單なる反射運動と異り、意識を伴はずに、しかも生命保存の目的に適合する行動なのである。之を本能運動と名づける。雞の雛が殻を破つて外に出るや否や物を啄むのも、や

はり本能運動である。初生兒には、生後約二十時間を経て授乳するを通例とするが、始めは旨く吸ひつけぬやうでも、暫くすると、長い練習の結果でもあるかのやうな驚くべき巧妙さで吸乳する。しかし一旦満腹すれば、嬰兒は其の唇を母の乳頭で如何に刺戟しても、最早容易に吸乳しようとしぬところを觀ると、之が單なる反射運動でないことが分る。

吸乳に際して始めから護謨の乳首で牛乳などを飲むやうな習慣をつけられた嬰兒は、其の後母の乳頭を吸ふことが出来なくなる。かく本能は一度ある刺戟と結び著くと、他の刺戟に對しては決して發現せぬやうになるもので、之を本能の早期特化性と言ふ。孵卵器で孵された雛が、親雞の移行には見向きもせず、最初に結び著いた刺戟である人間の移行にだけ追隨するのも同様である。

生後一箇年餘を経て離乳した後の幼児は、何時かかの巧妙な吸乳の方法を忘れるが、之は適當な刺戟を缺く時に消失する本能の一時的に因るのである。なほ本能にはそれ〴〵一定の時期に發現すると言ふ定期性がある。人間では吸乳のやうな自己の生命保存に關する本能が最も早く現れる。萬物の靈長と言はれる人間も、其の生活の出發點は此の本能生活である。しかし本能として遺傳されるのは、其の大體の輪廓だけで、一々の内容は、出生後の經驗によつて決定される。例へば四歳位から現れる蒐集本能のやうなものでも、どう言ふ物を集めようとするかは境遇によつて同じではない。本能が外界の事情に應じて其の體様を變へ得る性質を變化性と言ふ。人間の本能では、此の變化性が動物に比べて特に著しいから、教育することも可能なのである。兎に角其の巧

妙な發現を觀、不可思議な性質を察する時、本能こそは實に解き難い生物界の謎であると言はねばならない。



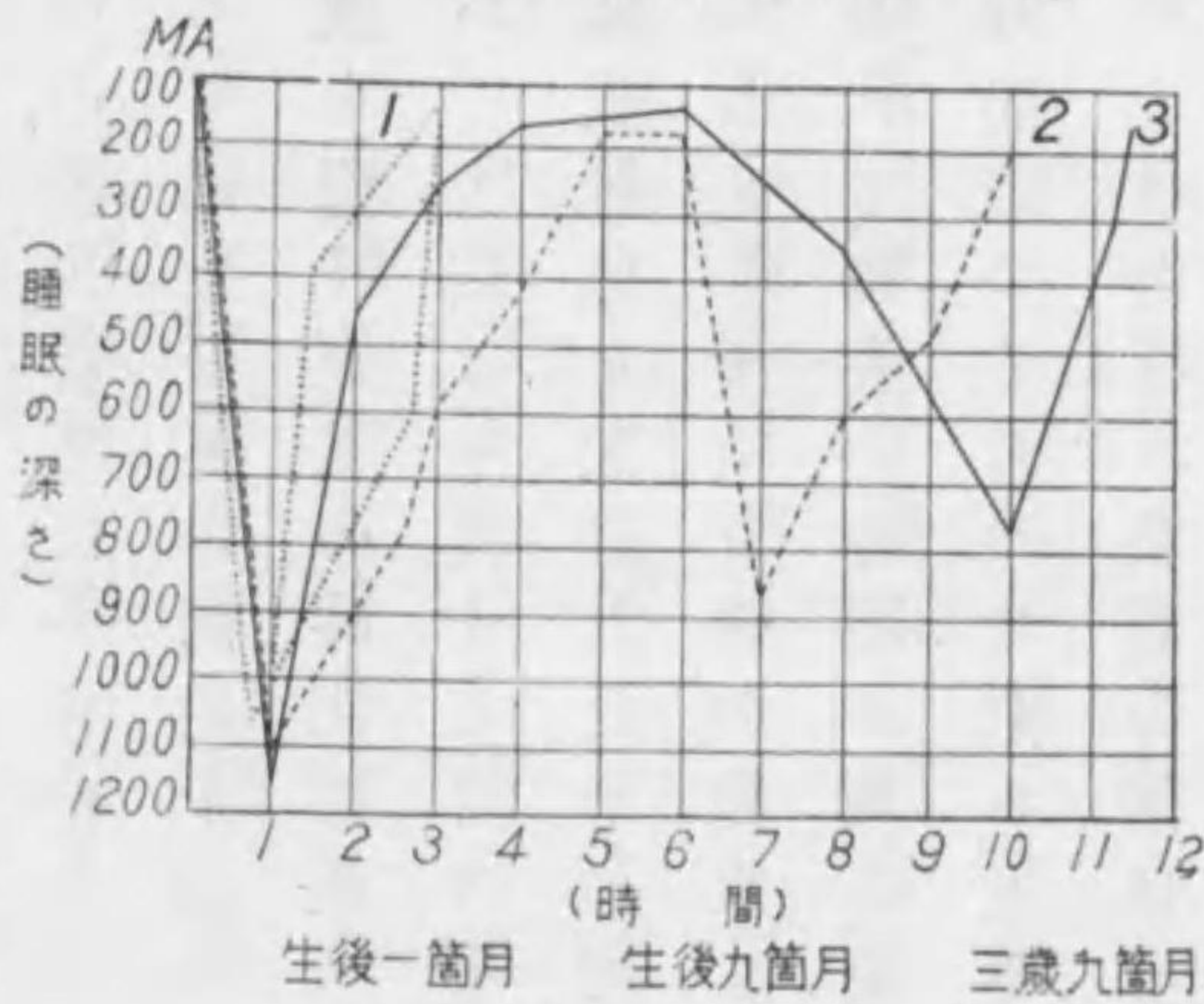
嬰兒の誕生當座は一日の大半を眠つて過す。其の間約十回ほど目も眼を覺すが、其の時間は極めて短い。上圖は生後十七日の嬰兒の睡眠状態を記録したものである。しかし漸次身體の發育するに連れて、睡眠の時間が減じ、覺醒の時間が長くなつて来る。そ

して後には全く其の位置を顛倒するやうになる。次頁の圖は嬰兒と幼児とに就いて實驗した結果を示したものであるが、嬰兒の

睡眠が第三時目で終つて居るのは、吸乳と用便との自然の要求に促されて、約三時間毎に眼覚めることを語つて居るものである。かく睡眠と覺醒とが頻繁に交替することは、初生兒生活の一特徴である。2と3の幼兒では深い眠りに入る時期が二回あるが、何れも約三時間毎に眼覚めた嬰兒時代の名残を止めて居るのも面白い。

嬰兒の睡眠に就いては、専ら安眠を妨げぬやうにせねばならぬ。靜かな寢室、寢心地の好い寢具、適當な腹工合と、なるべく内外の刺戟を少くすることに注意すべき

兒童の睡眠の深さ (クツェルニー氏)



で、燈火をあか／＼と點けた儘にして置いたり、母親や祖父母が抱寝したりすることは決して良い習慣ではない。

### 第三節 感覺と動作

睡眠が嬰兒の生活の大半を占めて居る間は、感覺作用は凡て受動的である。感覺とは、眼によつて物を視、耳によつて音を聴き、鼻によつて香を嗅ぎ、舌によつて味を味ひ、皮膚によつて温かさや硬さを知ると言ふやうに、身體内外の刺戟によつて起る最も簡単な精神の働きである。是らの感覺——視覺・聽覺・嗅覺・味覺・皮膚覺等——の結合によつて、犬とか鳩とか言ふやうな纏つた事物の意味を知ることを知覺と言ふ。しかし初生兒にあつては、未だ感覺機關が發達して居らぬので、皮膚覺や味覺を除いた他の感覺は殆ど

完成して居ない。初生兒の外耳や内耳は、共に粘液に密閉され、鼓膜も其の位置が正しくないから、未だ聽覺を有たない。漸く數日後に強い音を感じ、四五箇月の後に始めて音の方向を知るやうになる。視覺に就いても、光は誕生と共に感知し得るが、色の感覺は頗る遅れて發達するもので、生後十一箇月頃から色の違ひを確實に區別し始める。故に生後僅に二三箇月の嬰兒に、赤や緑の色彩を施した玩具などを視せても無意味である。かく初生兒の感覺は未完成であるばかりでなく、發達したものにあつても、單に個々の刺戟に斷片的に反應するだけで、纏つた知覺を爲し得る譯ではない。

生後二三箇月を経て覺醒の時間が長くなる頃になると、嬰兒は何物かを求めるらしく頻にあたりを見廻すやうになり、四箇月乃

至六箇月の間に物を掴むことを始める。かゝる活動は、外界の刺戟に對する單なる反動ではなくて、積極的にある事物に對するものとなり、そこに目的の方向が現れる。最初に嬰兒の目的となるものは、おそらく母親の聲と顔であらう。そして遂には是らものゝに親しむと共に、見知らぬ顔に對して恐れを抱くやうにもなる。之は嬰兒が全一の人として行動するやうになつたことを示すもので、大人と同様の自覺には達せぬまでも、とにかく自我と非我との對立を覺る第一歩をなすものである。此の時期に達すれば、欲するものを引寄せたり、邪魔物を押除けたりして、自分以外の物を積極的に支配しようとする努力が、繰返され、種々の方面に互つて之が練習される。嬰兒にとつては、四肢を張り物を握ること其のことが愉快なので、其れによつてどうしようと言ふのではない。

しかし此の單純な遊戯が、やがて人間生活の根源をなすのである。かやうにして一箇年の終りには、嬰兒の運動が完全に物に對つて爲されるやうになり、自發的な運動と反動的な運動とが渾然融合して、纏つた動作にまで發達して來るのである。此の時期を嬰兒期と呼ぶ。

#### 第四節 身體の發育

兒童は大人の縮圖ではない。すでに身體の恰好が著しく大人と違つて居る。大人の頭部は男では身長約八分の一、女では約七分の一であるが、初生兒の其れは四分の一を占めて居る。腦の重量も、大人では全身の重量の三十分の一乃至三十五分の一であるが、初生兒のは約四百瓦ほどあつて、全身の重量の六分の一乃至



子供と大人の頭部比較 (シュトラッツ氏)

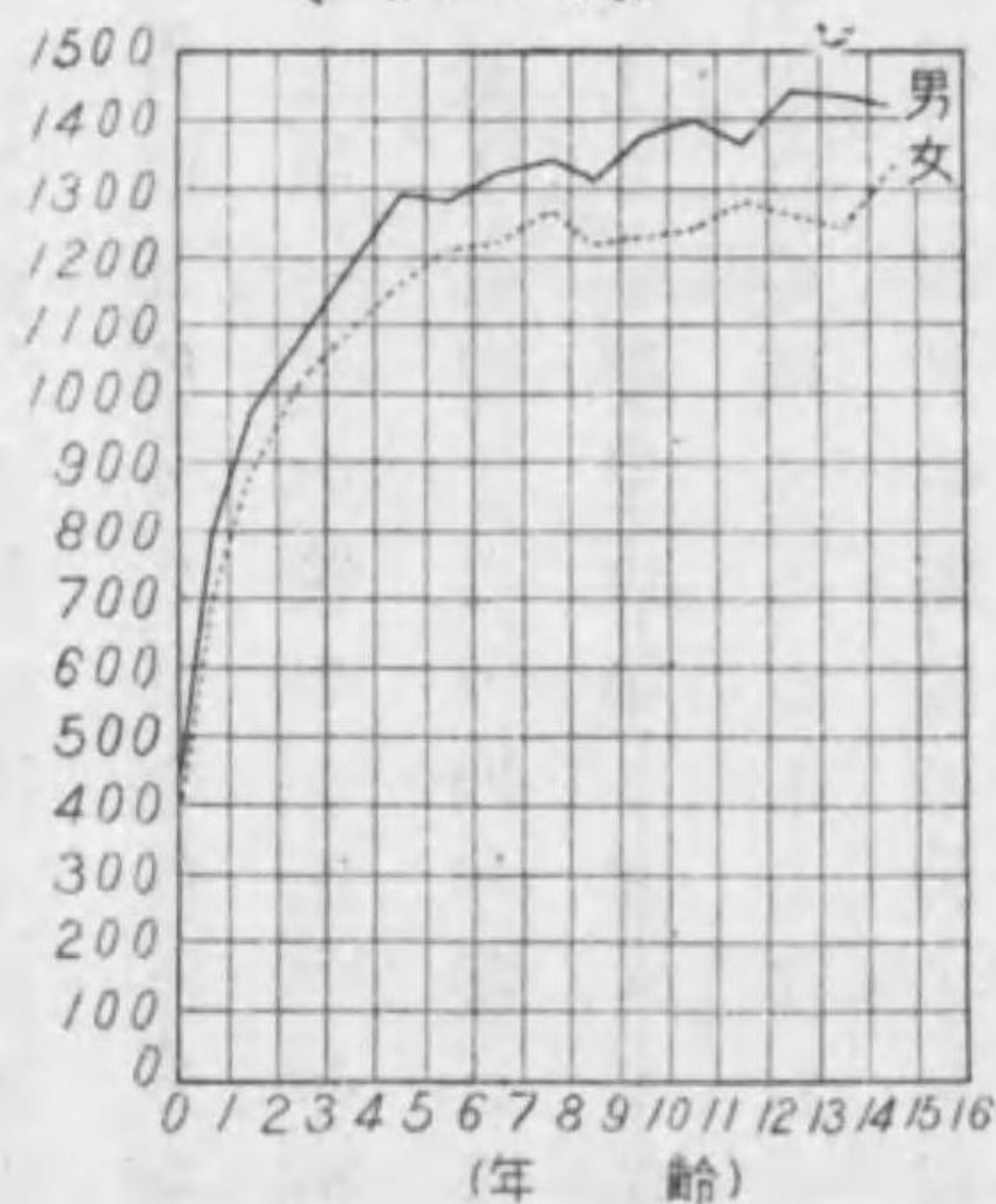
八分の一を占めて居るほどで、大人のそれに比べると形も分量も頗る不釣合と考へられるが、寧ろ其れが自然なので、過小腦は白痴の相である。

腦の發達は他の部分に比べて急激で、生後

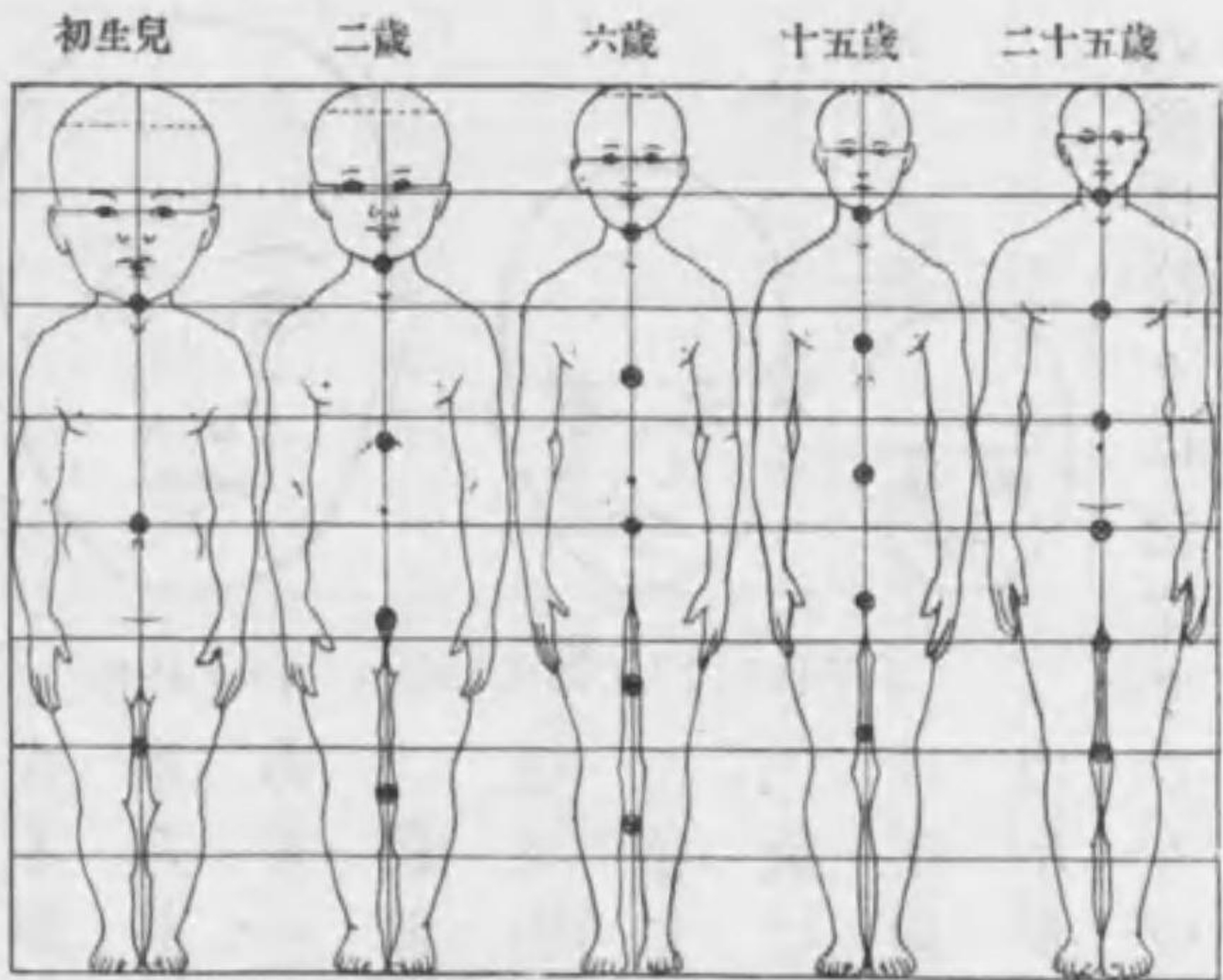
九ヶ月で約二倍になり、三歳に達すれば約三倍になる。其

の後は徐々に發達するもので十四歳に至つて略、大人に近づく。

腦重の増加と年齢との關係 (スカンモン氏)



腦髓の中で特に發達の早いのは小腦である。小腦は出生後最初



身體發育の比例比較 (シュトラッツ氏)

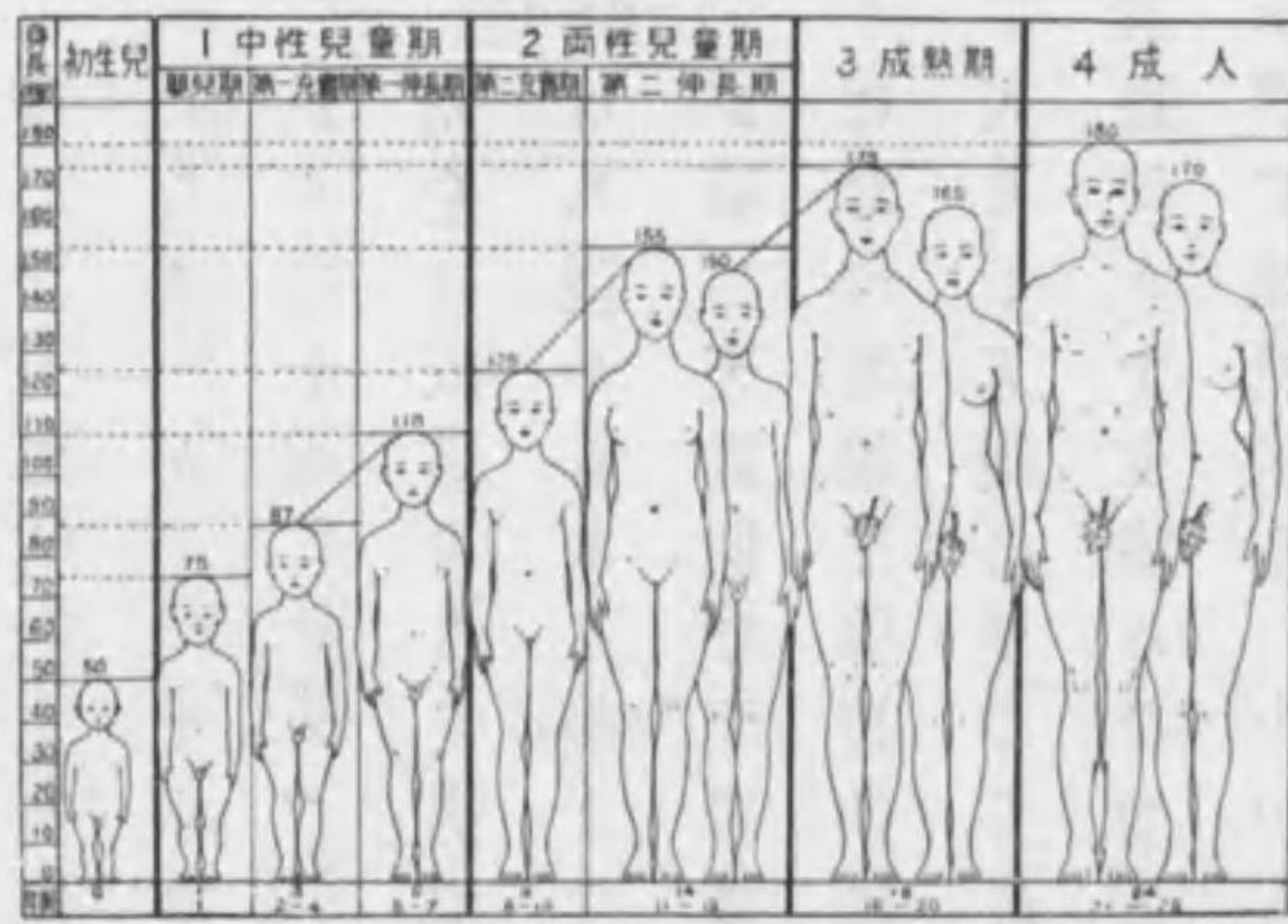
人にあつては脚が全身の半を占めて居るが、初生兒の脚は僅に身

の五箇月間は徐々に、其の後は急激に發達し、第一年の後半と第二年の前半に最も旺盛となり、四年後には略完成する。嬰兒は第一年から第二年にかけて座することと歩むこととを學ぶが、其の際、體の調子を取つて均衡を保たせる作用をなすものは小腦である。

全身の發達では、横に擴がるよりも縦に伸びる方が勝つて居る。大

長の三分の一に過ぎぬので、體の中心點が臍の上部に位する。そして横に太ることと縦に伸びることとは一様でなくて、週期をなすものである。大凡二歳から四歳までは縦よりも横に太る割合の多い時期で、之を第一充實期と呼び、五歳から七歳までは横よりも縦に伸びる割合の多い時期で、之を第一伸長期と呼んで居る。ここまでは男女の間にさしたる相違はないが、其れ以後になると、著しく發達に遅速が起つて來る。女では八歳から十歳までが第二充實期で、十一歳から第二伸長期に入り、十三

人間の發育順序 (シュトラッツ氏)



歳に至つて最も旺盛に伸びて男を凌ぐやうになる。十四歳になると再び体重が増加する傾きを生じ、十五歳になつて第三充實期

年齢	身長(寸)		体重(斤)	
	男	女	男	女
初生兒	49.1	48.7	3.04	2.87
1	73.5	72.9	9.00	8.50
2	79.5	78.9	10.80	9.90
3	85.4	84.9	12.40	11.50
4	91.7	91.0	13.70	12.90
5	97.4	96.5	15.20	14.50
6	102.8	102.4	16.50	16.00
7	108.3	107.2	17.80	17.20
8	113.8	112.0	19.10	18.70
9	118.3	116.2	21.00	20.50
10	122.8	120.4	23.00	22.30
11	127.0	125.9	25.00	24.40
12	130.8	132.3	27.20	27.80
13	135.2	139.0	29.80	31.40
14	141.5	143.2	33.60	36.50
15	146.3	144.7	38.70	38.20

我が國兒童の身長・体重の發達  
(三島博士)

から二十歳にかけて略、完全に成熟する。男では八歳から十二歳までが第二充實期で、十三歳になつて第二伸長期に入り、十五歳に至つて最

も旺盛になる。十六歳からは体重の増加に傾き、十七歳になつて第三充實期に入り、十八歳から二十歳にかけて成熟する。かかる週期は季節にも現れ、秋冬は身長伸びることが春夏よりも少く、

体重の増加することが春夏よりも多い。之は季節の上から生物一般に現れる活動と体重の関係によるのであらう。

身體の發達は氣候風土によつて違ひ、民族によつて異り、文化の

年齢	身長平均(尺)		体重平均(貫)	
	男	女	男	女
7	3.55	3.50	4.728	4.577
8	3.71	3.67	5.215	5.021
9	3.87	3.82	5.768	5.554
10	4.03	3.98	6.239	6.146
11	4.16	4.13	6.860	6.702
12	4.31	4.31	7.437	7.491
13	4.46	4.48	8.322	8.472
14	4.64	4.65	9.232	9.572
15	4.78	4.73	10.181	10.249
16	4.84	4.72	10.715	109.80

小學校兒童身長體重平均  
(日本帝國文部省第五十四年報)

程度によつて同じでない。日本の兒童は誕生當座は獨逸の兒童と同じ速度で發達するが、其の後發育が急速になり、十歳になれば同年齡の獨逸の兒童よりも稍高く、十七歳で平均身長に達するが、

獨逸の兒童が大人の平均身長に達するのは二十歳である。更にセイロンの兒童は、日本の兒童よりも四年早く發育の頂點に達し、



十三歳で既に大人になつて居る。發達の遲速はともかくとして、一般に我が國民の體位は、歐米各國民の其れに劣つて居ると言はれて居るが、之は必ずしも決定的のことではなく、生活状態の改善、體育の獎勵、衛生思想の普及などによつて一層向上せしめることが出来ることは、最近の事實に徴して明かである。

健康なる精神は健康なる身體に宿ると言はれるほどで、身體の健康はあらゆる人間活動の基礎をなすものである。であるから世の母たちは、常に兒童の血色や表情に注意し、皮膚の弛張や全身の肥瘠に眼を着けて、其の營養の度を知り、身長や體重の増加に留意して、其の健康の様を察し、完全な發育をなさしめるやうにせねばならない。

## 第二章 幼稚期の活動

### 第一節 兒童の想像

嬰兒時代の單純な遊戯では、主として運動其のものの與へる愉快さが嬰兒を支配するが、二歳以後四五歳頃迄の幼稚期に入つた兒童の運動では、短い棒切れが刀として使はれたり、小さい枕が赤ちやんとして脊負はれたりして、戦争とか子守とか言ふやうな意味が結び附いて來る。故に其れはもはや單なる運動ではなくて、動作と呼ぶべきものであらう。かかる遊戯は大人の動作を模倣したものであるから、模倣遊戯と言つて居るが、兒童の遊戯に現れる模倣は、普通所謂模倣と言はれるものとは異り、棒切れが刀であ

り、枕が赤ちやんなのである。古繩の切れを蛇と見違へるやうなことを錯覺と言ふが、兒童は棒切れを刀と思ひ込み、枕を赤ちやんと思ひ込むところから、此の種の遊戯をまた錯覺的遊戯とも呼ぶ。



模倣遊戯(著者)

しかし兒童は棒切れや枕を刀や赤ちやんと誤つて知覺して居るのではなくて、兒童自ら棒切れに刀としての性質を與へ、枕に赤ちやんとしての意味を持たせて満足して居るので、一定の長さがあつて振り廻すことが出来れば木でも竹でも頓著なく、脊負ふことが出来れば枕でも座布団でも問題ではない。單

に振り廻し得ること、脊負ひ得ることなどの特徴を捉へて、其れを主要素とし、他は兒童特有の想像作用により意味を補つて、刀とし赤ちやんとするのである。かくて兒童は棒切れに名刀の光を見枕から赤ちやんの泣聲を聞くことにもなる。

單なる一箇の棒切れに曾て經驗した——光とか切ることが出来るとかの——事柄を結び附けて刀とするやうに、過去の經驗を材料として新しい事柄を考へる機能はたらきを想像と言ふ。結び附ける經驗の如何によつては、其れが銃はたらきともなり馬ともなる。故に想像作用は自由であり従つて愉快である。居ながらにして月宮殿を見ることも出来れば、龍宮を訪れることも出来る。發明と言ひ創作と言ふも、凡て發達した想像作用の賜である。かかる想像作用の芽生である幼兒の遊戯が、教育上如何に重要な意味を有つもの

であるかは、これで略理解されたことと思ふ。

以上述べたやうに、此の期の兒童にとつては、刀なり赤ちやんなりが實際に合ふか否かは問題にならぬので、玩具のやうなものでも、完全に出來て居るものよりも寧ろ粘土や濕氣のある砂のやうなものが喜ばれる。之は畢竟兒童の自由な想像作用に對して無限に變化する材料を供給し得るからである。

### 第二節 物の人間化

物に意味を與へて觀る幼稚期は、同時に言語を收得し始める時期である。誕生當座の泣聲が種々の意味を有つて居ることは事實であるが、其れは外から意味付けすることの出來る本能であつて、嬰兒自身が意識してさうした態度を現すのではない。ところ

が二箇月乃至三箇月目からは、泣くことの外に「ウ、」と言ふやうな單音を連續させて發聲することを始める。之も其の當初は潑刺たる生活力の發露と見えるだけであるが、やがて其れによつて或種の希望を現すやうになつて來る。其れは恰も單なる運動が、意味を有つた動作となるに等しい。此の時期に達した兒童は、すでに言語の世界へ足を踏み入れたものと言ふことが出來るであらう。かかる表現を母親が察して、兒童の希望を満足させることを繰返すうちに、兒童は何時となく音聲が或種の物と結合して居ることを知つて來る。例へば「マンマ」と言ふ音聲が、遂に乳を現すやうになるやうなものである。ここまで發達して來ると、周圍の音聲に對しても無關心でなくなり、いよ／＼言語の收得が容易になつて來る。

兒童が嬰兒期に現す人見知り、臆氣ながら自我と非我との對立を覺るものであると述べたが、此の期の兒童にとつては、物は、或種の言葉を有つたものとなるので、之を介して周囲の人と關係するやうになり、言葉を通して始めて社會生活に入り込んで來る。遊戯に於て豊富な想像作用が棒切れや枕を刀や赤ちやんとして活したやうに、兒童は一音一語を活して同様豊富な意味を有たせるのである。「マンマ」と言ふ言葉が乳房にも乳汁にも吸乳にも使はれて、決して社會的の約束に拘束されない。如何なる音聲と如何なる物とを結合するかは、兒童にとつては任意であり氣紛れである。

かくて言語の理解力も加り發表力も進んで來ると、盛に人を相手として話し掛けるばかりでなく、物をも人間化して話し掛けるやうになる。物を人間化することは、幼稚期の一大特徴である。自分の躓いた箱を打つたり、犬や猫に話し掛けたりするのは、箱や犬猫が自分と同じ願を有ち、同じ感情を有つものと觀るからである。すべての幼兒は自己中心である。どこまでも氣分に生きる。幼兒には、義務もなく仕事もなく法則もない。

大人の生活では、文藝に物の人間化が現れる。自分の生命を他の事物に移し入れて、之に語らせ感じさせ欲求させるのは、兒童ばかりでなくあらゆる人間の自然の傾向であるが、幼兒のは大人のやうに其れが意識的ではない。従つて極めて自然であり自由であつて、技巧がない。かかる模範的な人間化を眞似たものが、大人の作つた童話であらう。

## 第三節 遊戯の生活

幼稚期(二歳—四歳)から幼年期(五歳—八歳)の初め頃にかけての児童の生活は、營養と睡眠を除いては殆ど遊戯の生活である。幼兒の遊戯に想像作用の働くことはすでに述べたが、其の先天的の基礎をなすものは本能である。出生と共に現れる本能は營養本能(吸乳)であるが、次いで運動本能が現れ、頭を支へること、物を握ること、座すること、這ふこと、立つこと、歩むことなどを始める。其の外何事でも自分自身でやらうとする活動本能、物を試さうとする實驗本能、他を真似る模倣本能、友だちを求め、社會本能などが次に現れて来る。此の間に眼や耳等の感覺機關が練習され、種々の事柄が經驗される。是らの經驗を基礎として豊富な想像作用

が働き出すのである。

大人の生活では想像された世界と現實の世界とは混同されな  
いが、兒童にとつては此の區別がなく、括り枕が生きた赤ちやんで  
あり棒切れが正宗の名刀であることは嚮に述べた通りである。  
大人は二元の世界に住み、兒童は一元の世界に生きる。大人の作  
業では作業の目的と目的を達する爲の活動とは區別して考へら  
れるが、兒童の遊戯では現實を離脱し利害を超越して之に没頭す  
るので、そこには目的もなく手段もない。たゞ活動の爲に活動す  
るのである。強ひて言ふならば、活動其のものが目的なのである。  
しかし兒童は活動が目的であると意識して居るのではない。  
かやうに遊戯は、之を内から觀れば自己以外に目的を有たぬも  
のであるが、外から察すれば兒童の全人格の發達にとつて重要な

意味を有つものである。が、如何なる意味を有つかは學者によつて其の解釋が必ずしも一樣ではない。幼兒の遊戯では、動物及び



—ジャングルジム—  
攀登遊戯

原始時代の人間の本能中やがて消去るやうな低いものが無害な方法で繰返されるので、男兒に現れる争闘遊戯・狩獵遊戯・破壊遊戯・攀登遊戯・投物遊戯などは其の適例であると説くもの、之を衰微説或は反復説と言ふ。また遊戯は高等動物が其の時と力を生命保存の爲に使つて、なほ餘力ある時に自ら外に現れるものであると説くもの、之を餘剩力説と言ふ。

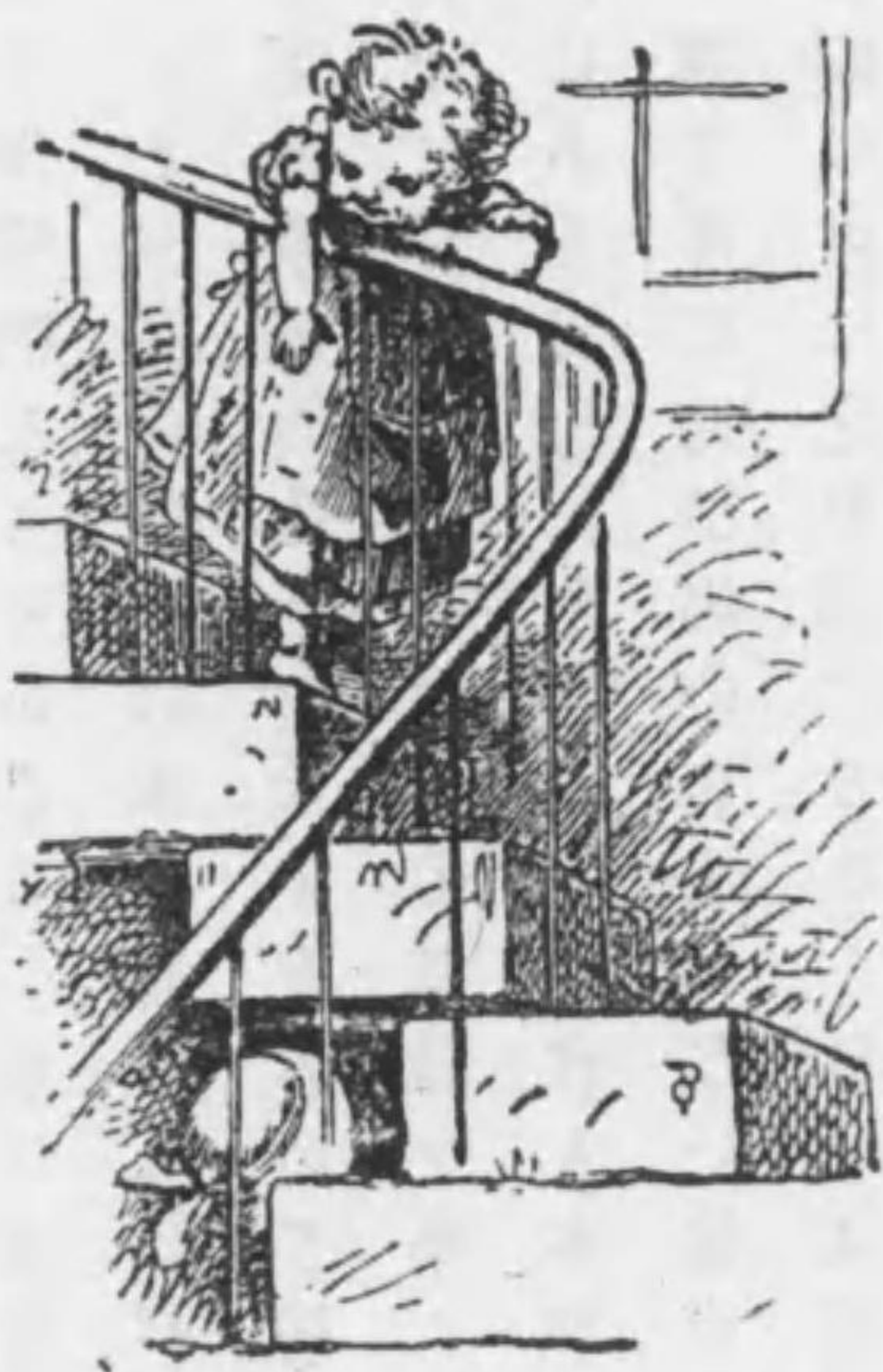
是らは何れも生物學的な觀方で、前のは其の原因を遠い先祖から遺傳された本能に歸する點で説明を過去に求め、後のは生理的な生活力の餘剩に原因を置く點で説明を現在に求めて居る。更に遊戯を將來の生活の準備と觀る練習説(自己陶冶説)がある。仔猫が毬に戯れ、女兒が人形遊びをするのなどは、やがて生長の後に鼠をとり母となるの準備であると言ふのである。動物でも人間でも、出生と同時に完全な働きを備へて居るものではない。殊に人間は其の點で動物よりも劣つて居て、人生の約三分の一の兒童期を有つ程であるが、之はやがて複雑多様に發展し得る素質が與へられて居て、其の發展に長い年月を要するからであるとも觀られる。其の爲には外からの教育が必要であるが、其れと同時に兒童自身の自己陶冶によらねばならない。遊戯は其の主要な一形式

で、不知不識の間に行はれる自己陶冶であり、之によつて體力が練られ、感覺機關が練習され、知識が收得され、技能が錬磨され、共同心が養はれ、更に自己を主張し、自己を抑へつけることを學ぶのであると説く。此の説では過去から遺傳される素質を遊戯の基礎と観、將來の生活に關係させ、しかも現在の活動にも意味を認めて居るやうである。

右の外、兒童の本能中の有害なものが無害な遊戯に現れて本能を淨化するのであると説く淨化説、心身の片寄つた生活を遊戯によつて補充するのであると説明する補充説、遊戯は疲労を回復する手段であると観る休養説などがある。以上何れにも一面の眞理があるのみならず、其れらが各々相補つて居るやうに考へられる。故に之を多方面から観ることによつて始めて、遊戯の眞の意

味が盡くせるのではあるまいか。

遊戯の精神的基礎をなして居るものは想像作用であるから、想像作用が豊富であるか否かは、やがて遊戯の種類の多少に關係す



實驗遊戯 (アメント氏)

る。文化人の兒童の生活に現れる遊戯でも、性別により居住地により生活程度によつて様々であるが、之を活動の仕方から分類すれば、單に四肢を動かす運動遊戯、物を破壊するところを喜ぶ破壊遊戯、積木をしたり砂山を築いたりする構成遊戯、發動的に物を試さうとする實驗遊戯、好んで大人の生活を眞似る模

傲遊戯、他と共同して遊ぶ社會遊戯などを擧げ得る。其の中には個人的なものがあり社會的なものがある。また進歩的なものがあり保守的なものがある。或は文化を承け繼ぐことに役だつものがあり其の發展の本を養ふものがある。何れにしても遊戯が兒童就學前の生活の大半を占めて居て、自然に其の心身を陶冶し將來に於ける社會生活の基礎を築くものであるとすれば、教育の任にある父母は勿論國家社會も亦等閑に附し去ることは出来ない譯で、殊に遊び場の恵まれない都市の兒童の爲に、街頭の空地や公園の中に之を設けることなどは極めて大切な施設である。

#### 第四節 童話の世界

兒童が四歳頃になると、簡単な意味を現す連続した言葉を理解

し得るやうになるばかりでなく、自らも言現し得るやうになる。此の時期から言語の形式で現された想像の世界に興味を有つやうになり、好んで他から聴いたり自ら發表したりするものである。此の要求に應じ得るものが童話である。童話は神話の一種であるか、又は神話から轉化したものかであらうと觀られて居るが、とにかく文野の別なくあらゆる民族が之を有つて居る。

遊戯は旺盛な想像作用を自由に身體の活動に現す生活であるが、童話は之を働かせて自由な觀念の世界に遊ぶ生活である。觀念とは心の中に憶ひ浮べられた像である。眼前に櫻の花がある時は、其の花の色や形をありのままに知覺することが出来るが、一度知覺した色や形は、其の物が眼前に無くても直に忘れ去るものではなく、機會ある毎に觀念として憶ひ浮べることが出来る。想



像作用はかかる舊觀念を結び合せて新しい觀念を造る働きで、曾て觀た老婆の顔の觀念に、牛の角の觀念を結び附けて般若を憶ひ浮べるやうなものである。先に説いたやうに想像作用の基礎をなすものは、すでに得た經驗であるから言語の形式でなされる想像作用でも、日常直接經驗しつつある事柄を出發點としたものが兒童には喜ばれる。作り話が童話の前驅をなすのも其の爲である。

童話の世界は夢に近い世界であり、一種の錯覺と觀られる世界である。此の世界に現れる人物や動物は勿論、器具や家屋などから金銀珠玉の類に至るまで、それ〴〵獨特な性質を具へて居る。そして其の人物の性格は、強いとか、弱いとか、善いとか、悪いとか、或は魔力を有つて居るとか言ふやうに頗る單純である。しかも舌

切雀の親切なお爺さんと慾深なお婆さん、花咲爺の善いお爺さんと悪いお爺さんと言ふやうに、必ず反對の性格の持主が相對立して住んで居る。のみならず指にも足りない一寸法師や、未だ頑くない子供の桃太郎に、鬼を退治するだけの力と勇氣を與へて敢て疑はないのは童話の特徴である。かかる超自然的な力を有つたものを喜ぶのは、無意識のうちにさうした願を兒童が有つて居るからで、兒童にとつては桃太郎や一寸法師は、自分以外の存在ではなくて、自分自身を現すものなのである。

童話の中では動物は勿論無生物まで人間化されて居るが、其れらのものの行爲の動機が極めて單純で、鬼ヶ島から來た鬼が人間に害をなすと聞いただけで、直ちに鬼退治を思ひ立つ、するとお爺さんもお婆さんも即座に同意を與へて兵糧としての黍團子を作

つてやる。其の黍團子が、桃太郎始め、犬・猿・雉の同勢の往復を支へ得るかどうかなどは、固より問題ではない。同様に其の行爲の規範も單純で、善いものには幸福、悪いものには禍が報いられることになるのである。

また事件の變化が奇術的であることも童話の特徴である。拾つて來た桃を割つたら赤兒が生れ出たり、臼を焚いた灰を振掛けたら忽ち枯木に花が咲いたりする。どこまでも理窟抜きであるところが面白い。「それだから皆さんも……」などと、理窟や教訓を表に現さうものなら、此の時期の兒童は其の話に耳を貸さなくなる。

かやうに童話では、一切現實に束縛されないから、事件の起つた時間も場所も問題にならない。「昔々或所に……」と言つても、其れ

がどれほど昔なのか、どんな所なのかは問ふ所でない。童話では時間空間を超越して優に別天地を建てて居るのである。

なほ誇張も童話の一特徴である。即ちガリバー旅行記中にある、六人も一掴みに出來たと言ふ小人國の小男や、足の長さが山の大木ほどもあつたと言ふ大人國の大男のやうに、すべてが極端で兒童の自由奔放な想像作用に十分な満足を與へるやうに出來て居る。

此の期の兒童は、單にかかる童話の世界に身を置くことを喜ぶばかりでなく、自らの想像の世界を他人に物語ることをも喜ぶ。しかも其れをさも實際に経験したかのやうに物語るが、内容には辻褃の合はぬ所が多いから、大人から観れば記憶の誤りか故意の虚言のやうに取れるが、決してさうではない。其れは想像の錯覺

と言はれるもので、童話を語る児童には、眞理も虚偽もなく現實も非現實もない。

童話の時代は四歳から八歳位までで、幼稚期の後半から次に來る幼年期に掛けてである。童話の内容に疑を挟むやうになると、此の世界を離れて來る。もつとも此の時期の間にも「何故」どうして」と言ふやうに疑問の形で話しかけるが、之は單に問ひ或は答へる活動其のものに意味があるので、内容に疑問を有つ爲ではない。抑、疑ふとは、眞理を要求することである。かかる客觀的な價値を追ふことは精神の機能でなければならぬ。遊戯時代の児童は主客未分の生活をして居るが、やがて話すこと、數へること、作ることとを學ぶ間に、精神生活の芽生えが現れて來る。之を擁護して順調な發達を遂げさせることが、家庭や幼稚園の任務である。

### 第三章 幼稚園の教育

#### 第一節 幼稚園の誕生

児童が言葉を通して社會生活に入込み得るやうになると、頻りに相手を求めて話しかけたがるものであるが、其の相手が自分と同様な要求を有ち、互に之を充たし得る同輩である時、是らのものが相集ると言ふことに児童は無上の喜びを感じずるものである。此の頃になつて、社會本能が発現し始め、他と共同して遊ぶ社會遊戯が盛になるに連れて、一層友だちを慕ひ求めるやうになつて來る。そして友だちとの共同生活を營むうちに、單なる自己中心の生活に破綻も出來、疑問も生れて來て、前に述べたやうに精神生活

への芽生えを觀得るやうになつて來る。そこでかかる兒童の要求を充たし、精神生活への芽生えをも擁護して順調な發達を遂げさせねばならぬ義務が、親たち——特に母親に課せられる。しかし一般には父母が其の知識を缺いて居るとか、共に職業に従事して居るとか、或は兒童の生活に適せぬ環境にある——例へば適當な友だちがなかつたり、住居が雑沓の地にあつて運動や遊戯の自由が得られなかつたり、又は危険が伴つたりする——とか言ふやうな理由で、思ふやうな教育をなし得ないことがある。かうした場合に兒童を收容して之に適當な教育を施す所が幼稚園である。しかも之が自ら家庭の教育と小學校の教育との橋渡しになることは勿論である。

幼稚園は、もと「吾等をして吾等の子供と共に生活せしめよ」と稱

へた獨逸の教育家フレイベル(1782—1852)が、一八三七年ブランケンブルグに創始したのを以て嚆矢とする。フレイベルが幼兒の教育に特に眼を着けるやうになつたのは、一八三五年瑞西のブル



フレイベルの肖像

グドルフの孤兒院長に聘された時からであると言ふ。其の孤兒院には四歳乃至六歳の幼兒を收容して居た。フレイベルは是らの孤兒が收容される毎に其の處置に苦心したのであるが、之は畢竟彼らが全然家庭で顧みられなかつた結果であることを痛感して、すべての教育の基礎は幼兒の時代に築かねばならぬことを自覺したのであつた。

フレイベルは、萬物は神から來り神によつて支配されると考へた。就中神は自己の姿に象つて人を造つた。故に人も亦神の爲すところを學んで神性を現すことに力むべきであると言ふのである。其の爲には兒童の内部からの發展を助長せねばならない。内部からの發展は兒童の自己活動によつてなされるが、其の自己活動は自分と同類との交際によつて促される。しかも幼兒に於て、自己活動の最もよく現れるのは遊戯の時であるから、之によつて身體を強健にし、感覺を練習し、心情を誘發して、兒童の神性を發現するに至らしめようと言ふのである。其れは恰も園丁が植物を培養するに等しい。故にどこまでも兒童の環境を整へ自己活動を助長し、内部からの發展を擁護することを主とすべきで、積極的に早まつた教育を施すのではない。そこで其の教育は學校的

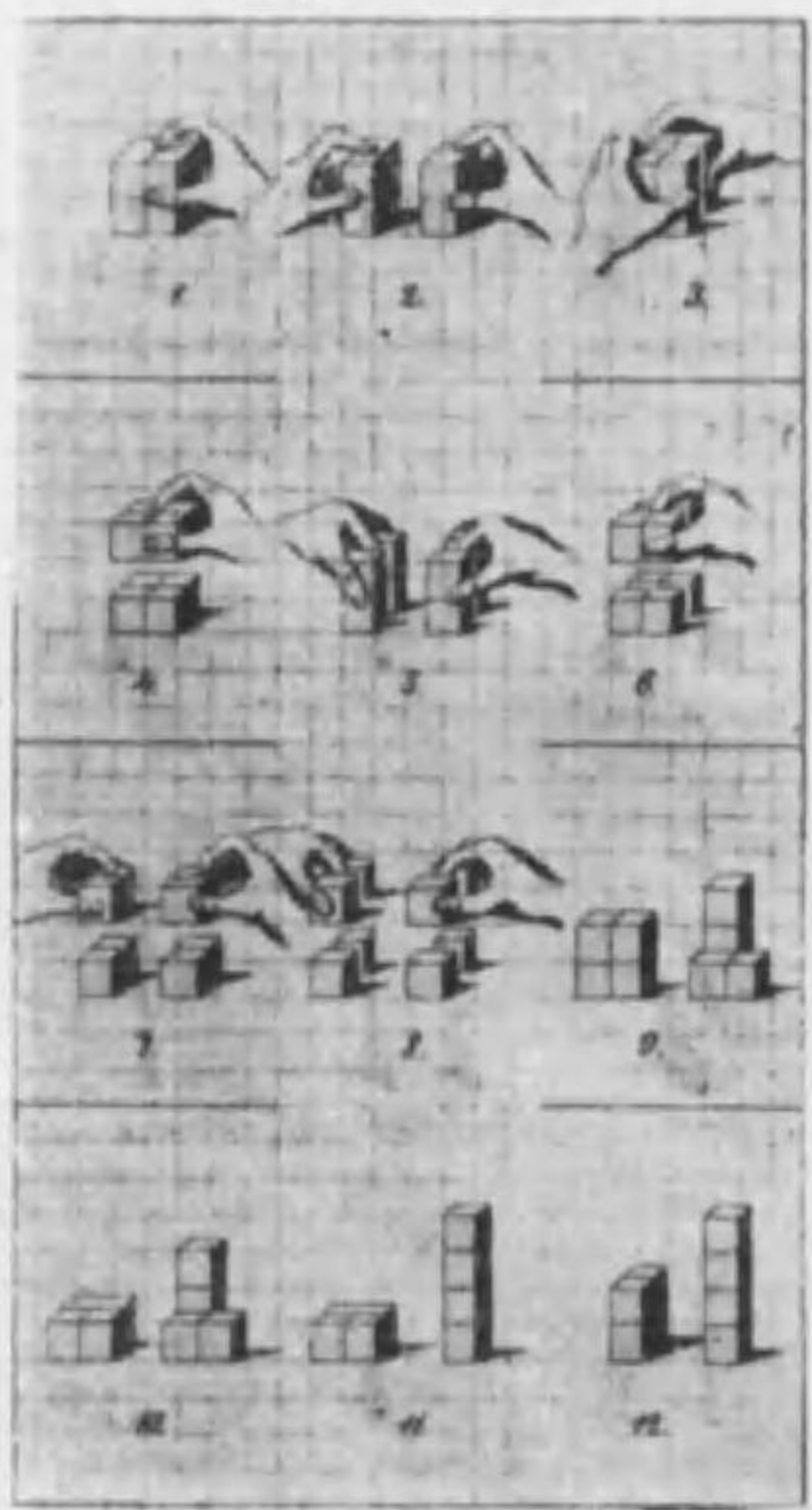


恩物……球

を保育と呼び、其の教育者を保姆と言ふことも理解されよう。

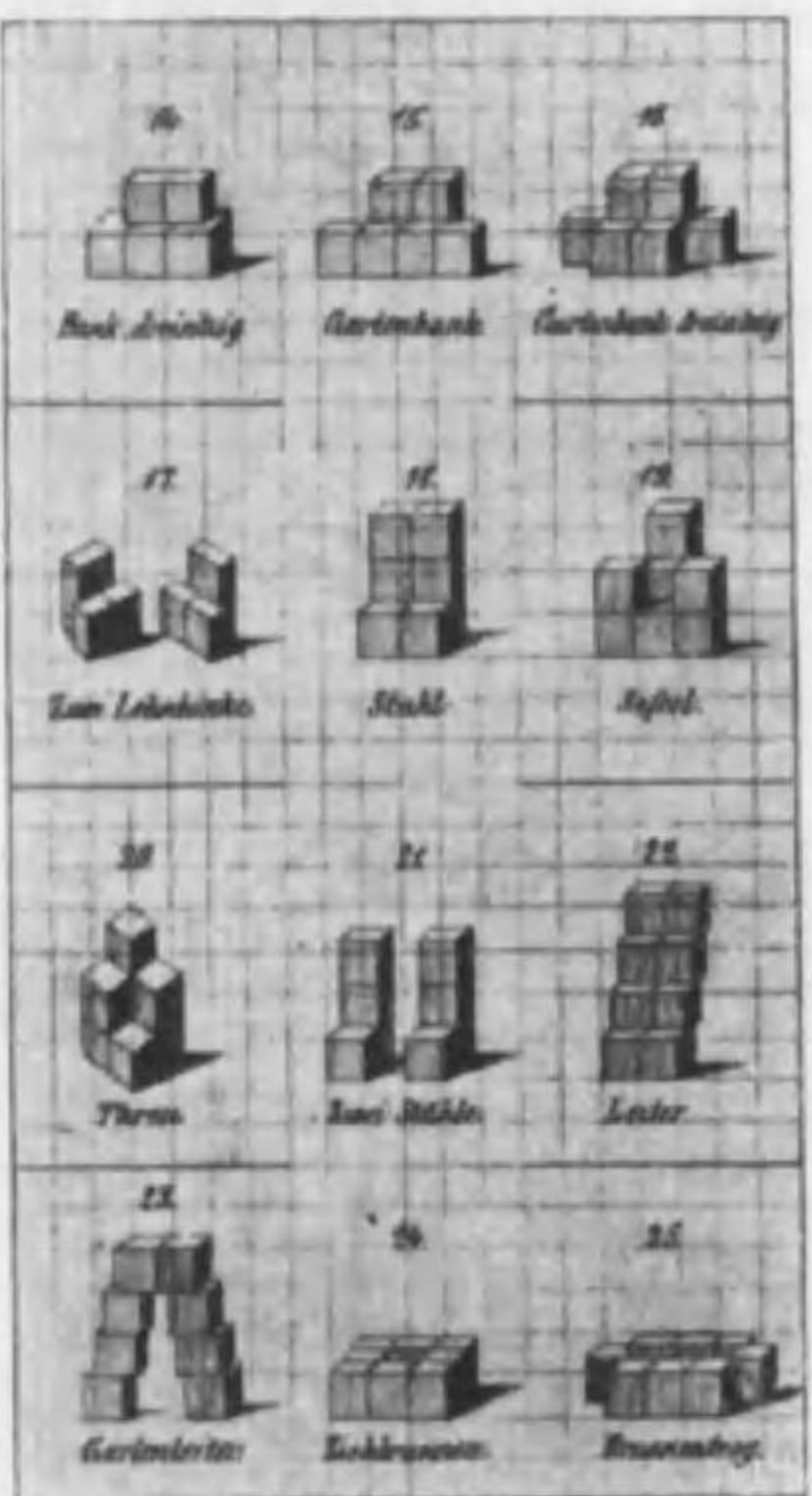
フレイベルは兒童の遊戯に使ふ教具を考案して、之に恩物と言ふ名を與へた。けだし之は神から恵まれた恩賜物と言ふ意味であらう。神に近づく爲には、神の造つた自然の認識からすべきであるが、自然の現象は

恩物……穀子



複雑多様であるから、幼児の爲には之を簡単に象徴した恩物によることが適當だと考へたのである。恩物とは(一)虹になぞらへて染めた六箇の毬——

恩物……毬



球、(二)球・圓筒・骰子——三體、(三)骰子を三方向に分割した八箇の小骰子——積木第一、(四)八箇の煉瓦形の積木——積木第二、(五)二十七に



恩物……球と骰子

分割された骰子——積木第三、(六)積木の三箇を三稜形に其の六箇を方形に横断したもの——積木第四、(七)板、(八)箸及び環、(九)糸及び紐、(一〇)粒體、(一一)紙刺し、(一二)縫取り、(一三)畫

き方、(一四)紙切り、(一五)紙織り、(一六)板組み、(一七)紙組み、(一八)紙疊み、(一九)豆細工、(二〇)粘土細工の二十種で、委しくは一から一〇までを恩物、一一から二〇までを作業と言ふべきで、是らによつて兒童は單に感覺機關を練り、自己活動をなし得るのみならず、實に宇宙の眞理にまで達することが出来ると思へたのである。

かくてフレレベルは、其の一生を幼児の教育に捧げたのであるが、其の後マーレンホルツ・ビューロー夫人によつて歐洲各國に宣傳され、終に今日の普及發達を觀るに至つたのである。其れと共に漸次フレレベルの根本精神に遠ざかり、卓上の遊戯などが過度に課せられ、單に機械的に習慣づけられるやうになつて、兒童の潑刺たる自己活動などは顧られなくなつて來た。かうした形式的な風潮に反抗して立つたのが伊太利のモンテッソリ女史(1870—)

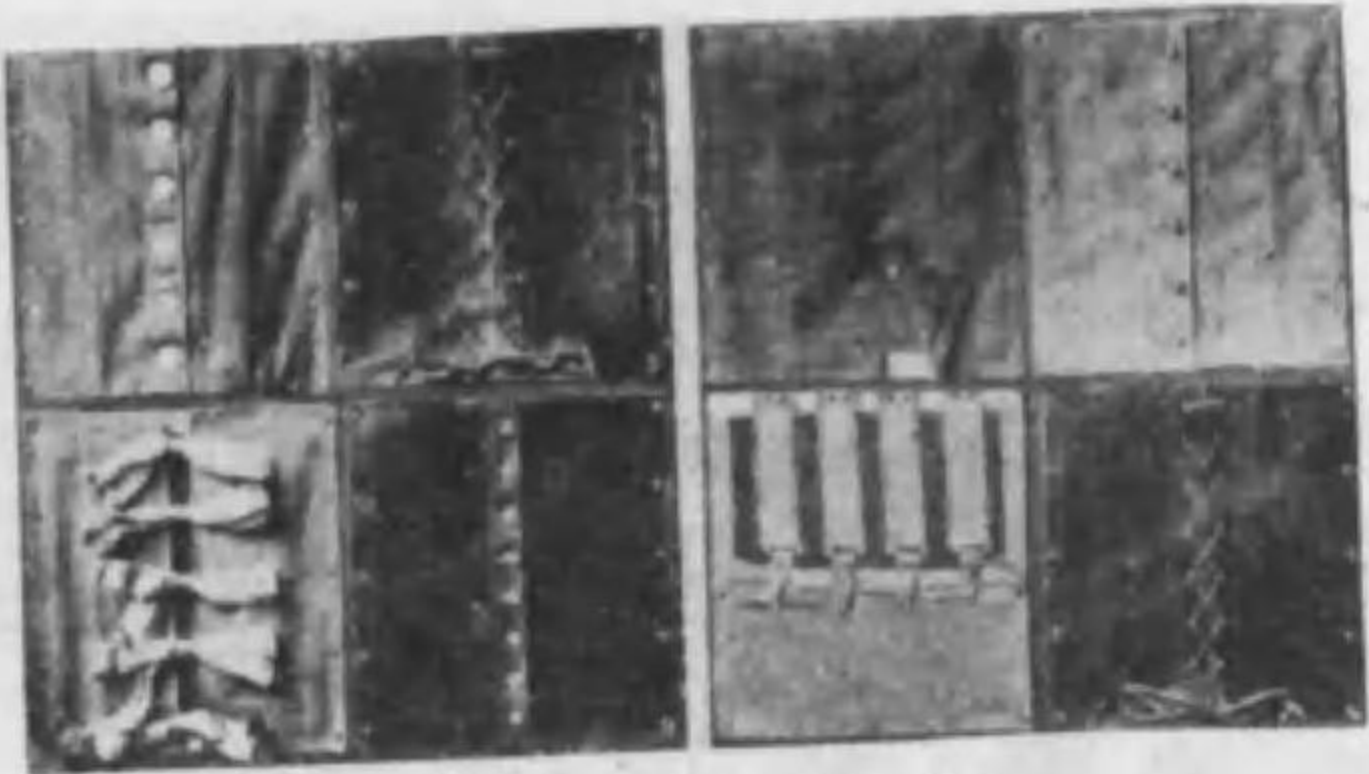
の唱へた自由主義である。モンテッソリ女史は一九〇七年「児童



モンテッソリの肖像

の家」と名づける一の教育所を設けて、貧民の子女を教育したのであるが、其れは女史が或精神病院の助手として経験した低能児教育法を正常児に適用したもので、之によつて幼稚園教育に一大革新を加へたのである。

モンテッソリ法の特徴は、環境を豊富にして生命を刺戟し、児童の内部からの發展を促さうと言ふのである。従つて、苟も他人の妨害とならぬ限り無制限の自由を許し、命令とか賞罰とか云ふやうな一切の外面的な教育手段を捨て、児童を個別的に取扱ひ其の

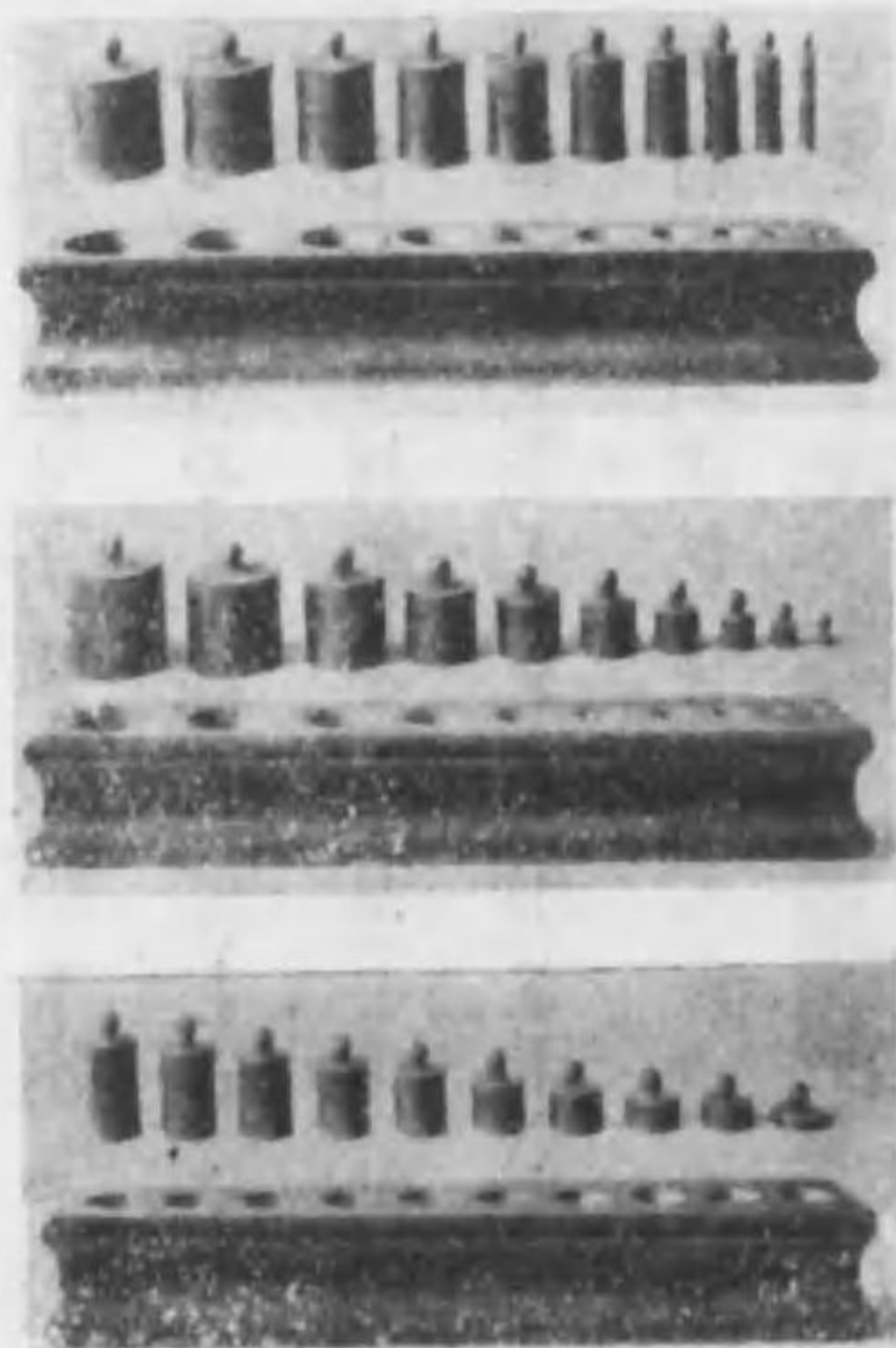


練習用服装

獨立の活動を獎勵した點にある。故に教師は兒童の發展に注意し監視することは必要とするが、之を支配してはならないとして、極端に兒童本位主義を高調した。そして女史はフレールベルの恩物を順序を踏む拘束的のものとして斥け、精神發達には感覺機關の練習を基礎とすべきであるとして、心理

的に考案された各種の練習器を使用させた。是らの練習器は單に感覺機關の練習だけに止まらず、重さや強さや性質な

練習用分銅





練習用文字並べ

どに就いて差等を見わける力類似のものや對比をなすものを知る力等をも練習せしめようとするのである。しかも材料を豊富に提供して児童の自由選擇に任せ、是らを使用させる方法としても専ら試行と錯誤によらしめ、自ら考へ自ら訂正させると言

ふやうにして、決して外から教へない。之も自由主義の當然の結果であらう。

此の「児童の家」では、机、椅子、戸棚、食器などあらゆる品々を、其の重さも大きさも凡て四五歳の児童に自由に扱ひ得るやうにしてあつて、其の名の示すやうに、どこまでも兒

練習用幾何形態



童の家として生活し得るやうに仕組んである。なほ彼らの精神的發達に應ずる爲に進んで書方、讀方、算術などまで學ばしめるが、



児童の家のごはん時

其れは新たな知識を授けようと言ふのではない。教師はあくまで傍觀者として背景に退いて居て、児童と環境との橋梁となるに過ぎない。しかし眞の教育では、教師が單なる傍觀者として「育つが儘」の態度を取るだけであつてはならぬ。其れは良き友だちであり、親切な相談相手であり且つ正しい案内者でなければならぬ。そして又忙しい監督者として



童を彼らの社會から孤立さすべきではない。どこまでも友だちとの交際によつて正しい認識に達せしめるやうに導くべきである。

### 第二節 保育の目的

我が國では、明治九年十月今の東京女子高等師範學校の前身東京女子師範學校に附設されたものが、幼稚園の始めである。其の後漸次普及發達して、現在では官公私立を合せて其の數一〇六八、保母三二七四人、幼兒數九四四二人(昭和二年三月一日現在日本帝國省第五十四年報)と言ふ盛況を示すやうになつた。

大正十五年四月發布された幼稚園令によると、幼稚園ハ幼兒ヲ保育シテ其ノ心身ヲ健全ニ發達セシメ善良ナ

ル性情ヲ涵養シ家庭教育ヲ補フヲ以テ目的トス(幼稚園令第一條)

と規定されて居る。更に幼稚園令施行規則には、

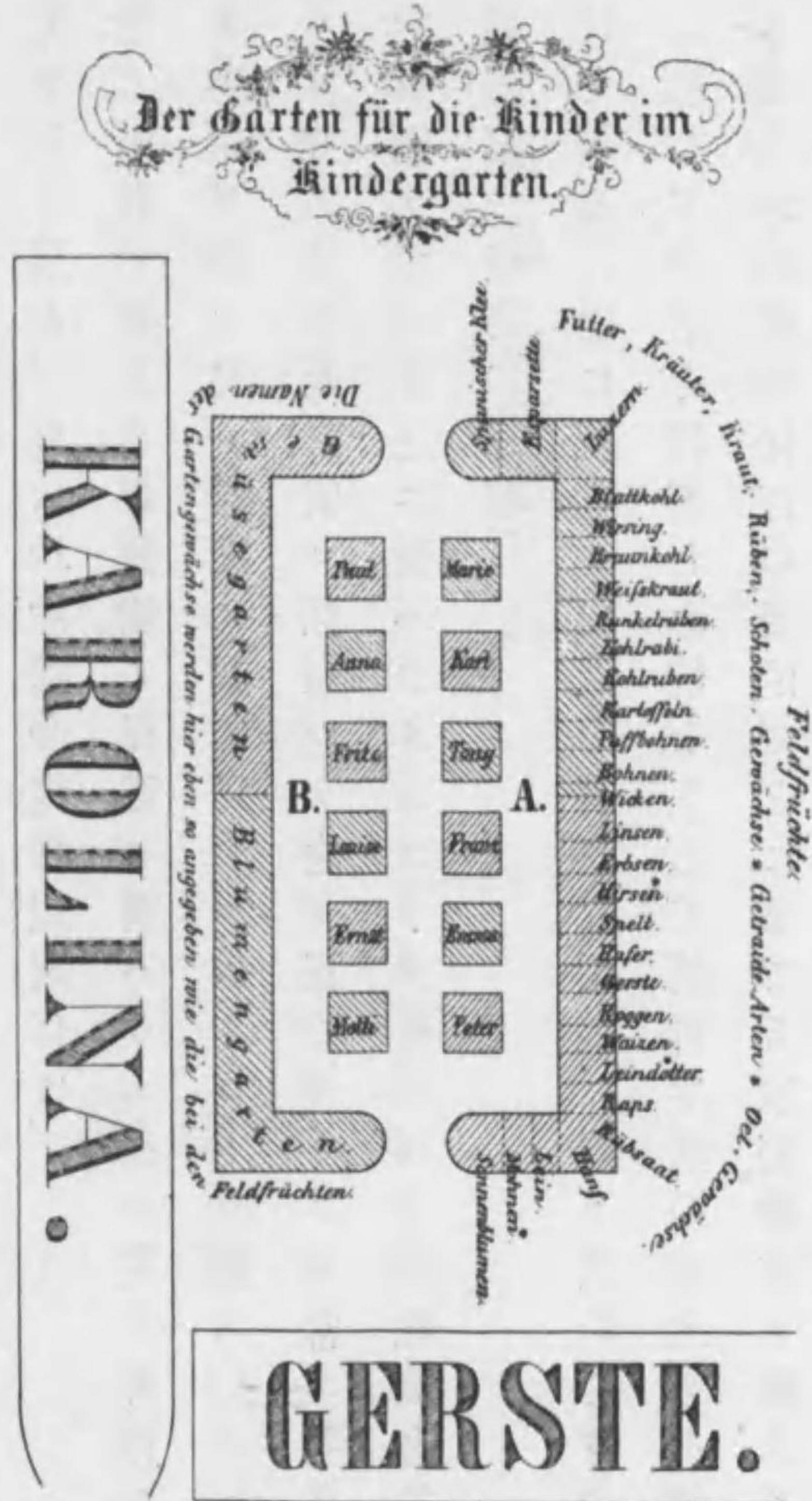
幼兒ノ保育ハ其ノ心身發達ノ程度ニ副ハシムヘク其ノ會得シ難キ事項ヲ授ケ又ハ過度ノ業ヲ爲サシムルコトヲ得ス

常ニ幼兒ノ心情及行儀ニ注意シテ之ヲ正シクセシメ常ニ善良ナル事例ヲ示シテ之ニ倣ハシムムコトヲ務ムヘシ(幼稚園令施行規則第一條第二、三項)

と掲げてある。之に觀るも兒童を善良な環境に置き、其の心身の發達に即して生活を指導し、心情を正して精神生活の芽生えを擁護することが幼稚園保育の目的で、どこまでも家庭教育を補ふことを任務とせねばならぬものである。

従つて其の設備に於ても右の趣旨に添ふものでなければなら

幼稚園に於ける幼児のための花園



ない。高燥なしかも變化に富んだ敷地、廣くて日當りの良い、と言つて殺風景でない遊園、通風彩光が十分に感じの良い遊戯室など、

程よい環境が望ましい。紙の鎖などの安つばい裝飾や、色彩の悪い雑誌の口繪などで保育室や遊戯室を充たすことは、幼児をして徒に混亂や不秩序の感じを増させるに過ぎないものである。故に子供にふさはしい、そして藝術的な繪畫を壁に掲げる位が好いと思ふ。裝飾は單純でなければならぬ。遊園には幼児の遊戯欲を充たすに必要な運動器具の外、花園を設けるとか動物舎を造るとかして、自然に話し掛ける機會を與へたいものである。なほ砂場を設けて豊富な想像生活、自由な遊戯の世界に浸らせるのも大切である。是らの設備は、何れも幼児中心の家庭的なものでなければならぬことは勿論である。

第三節 保育の方法

## 幼稚園令に、

幼稚園ニ入園スルコトヲ得ル者ハ三歳ヨリ尋常小學校ノ始期ニ達スル迄ノ幼兒トス但シ特別ノ事情アル場合ニ於テハ文部大臣ノ定ムル所ニ依リ三歳未満ノ幼兒ヲ入園セシムルコトヲ得(幼稚園令第六條)

とある通り、幼稚園に收容すべきものは幼稚期から幼年期の半にかけての児童であるから、保育の方法に於ても其の心身の發達を無視し、其の行動の意味を忘却してはならぬ。從來の幼稚園には、児童の動作を機械的に習慣づけ形式的に馴致して、フレイベルの幼兒教育の根本原理たる児童の自己活動を阻止し、生命と活動に充たされ、熱心と興味とをもつてなされねばならぬ児童の遊戯を、強制的な人工的なものに退化させて仕舞つて、園内の空氣を生硬

にし沈滞させ無氣力ならしめると言ふやうなものもまゝ見受けられた。指導は單なる形式の附加ではない。児童の生活過程を自由にし、之を適當に満足させて、児童自らに形式を生ませることである。モンテッソリ女史が、躰は自由を通して行はれなければならないと云はれたことは、單に「児童の家」だけでなく一般の幼稚園にも當てはまることであらう。「強ひるな、叱るな、譽めるな」とは児童教育の要諦である。勿論眞の自由は放恣でもなく、無秩序でもない。たゞ、保姆の劃一的な命令で機械的に動く人形を造るのではなくて、自由な遊戯の間に共働と互助とを學ばしめようと言ふのである。幼稚園では單に所謂お行儀の良い小さい大人を造らずに、元氣の溢れた児童らしい児童を養成せねばならない。であるから保姆としては自然の母に觀るやうな深い愛と博い同情とを

園児の生活に注ぎ、児童の生活の中に入り込んで、児童一般の傾向と行動の意味とを了解することを力めねばならない。かくして児童の生活の中に理想への閃きを観出せば、自然的な愛から眞の愛に轉向する。眞の愛の半面は敬である。「教育の秘訣は児童を敬するにある。」と言つたエマーソンの言葉は玩味に價する。

幼稚園令施行規則には、遊戯・唱歌・觀察・談話・手技の保育項目を掲げてある。遊戯や談話に就いては既に述べた。児童の生活は律動的であつて、極めて幼少の時から音楽に耳を傾け、やがて其れに合せて頭を振り足を動かし、終には他に倣つて口唱するやうになる。音楽は心情の自然の發露である。従つて環境の如何によつては往々卑俗なものを口ずさみ、母親をして眉を顰めさせるやうなこともある。であるから歌詞や歌曲は眞に児童らしい藝術的

なもので、しかも徳性を害はぬやうなものを選定して、児童の律動的生活を満足させてやらねばならない。此の満足は、児童をして歌ふことから踊ることに發展させる。之を整へれば舞踊が生れて來る。児童の舞踊は物を説明せず、意味を象徴する。故に童話の世界に於てのやうに、こゝにも藝術への萌芽が觀られて嬉しい。之を擁護し發展させることは、家庭や幼稚園の任務の一である。

児童には一方に破壊本能があると共に、他方には構成本能があり、是らが現れて破壊遊戯や構成遊戯となることは既に記したが、幼稚園での手技は是らの遊戯欲を充たす爲のものである。しかしフレールベルの考へたやうに、恩物の使用によつて、宇宙の眞理を知らしめるとか、神に近づかしめるとか言ふやうな形而上學的、宗

教的な意味よりは、寧ろ心理的、教育的な要求を充たすところに手技の價值があるのではあるまいか。即ち之によつて手の使用法が多方的に練習させられると共に、感覺機關の中で最も大切な眼が練習させられると言ふやうに。何れにしても、遊戯の本質を害ふやうな使用の仕方であつてはならない。此の點から考察するとフレイベルの恩物も形式的系統的ではあるが、モンテッソリの教具が感覺を孤立させて修練させようとしたのと共に、齊しく自由な兒童の活動を封じ易い嫌がない譯ではない。「玩具を與へて遊ばせることは、其れだけ兒童を束縛することになる」と言つた經驗家もあるほどである。此の言葉は稍極端らしくも考へられるが、少くとも恩物使用の上の箴となるであらう。

故にかゝる象徴主義の弊に捉はれることなく、自發的に使用さ

せて、其れによつて成功と力の意識を體驗させると共に、直接實物や繪畫や自然に接せしめ、兒童の觀察と作爲とによつて彼らの活動に出来るだけ出口を設けてやることが大切である。そして文豪トルストイから「新しい教育の不合理的な産物」と嘲られないやうに、どこまでも自然的な環境に兒童を置いて、自發的の興味に促されて、無意的に自己を陶冶し生活を充實するやうに仕向けてやることが、造化の意に適ふ教育でなければならぬ。

幼稚園保育の目的は、家庭教育を補ふにあること勿論であるが、更に之によつて世の母親たちを促して、幼兒教育の責任が如何に重且つ大であるかを自覺させ、家庭教育の方法を啓發するにあるとも言ひ得よう。此に述べた保育の方法も、幼稚園に借りて家庭教育の方法を論じたのである。幼兒教育の本體が家庭教育にあ

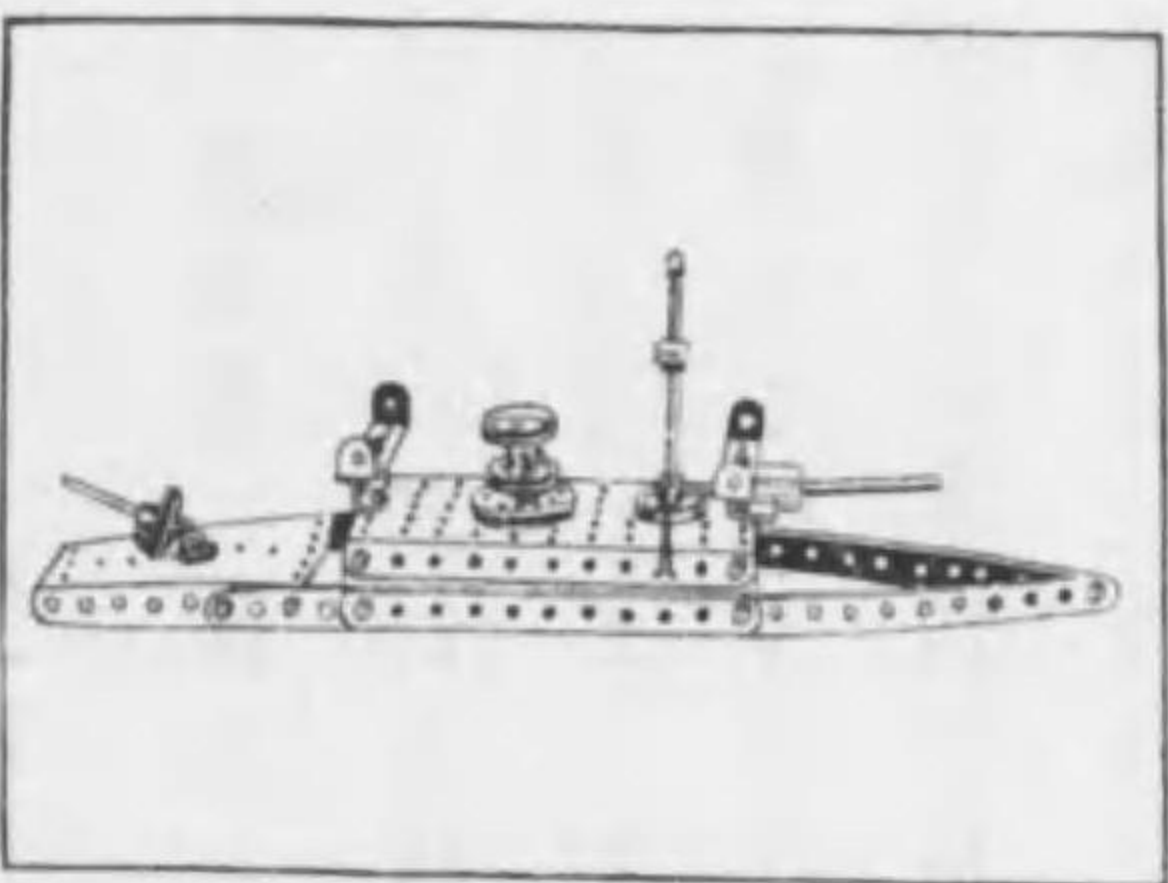
ることを忘れて、一度兒童を幼稚園に托すと、全然之に委ね切つて顧みぬ親たちもあるが、是らは自らの大切な義務を忘却するの甚しきものと言はねばならぬ。兩方から互に連絡を取つて、兒童教養の上に乖離のないやう注意すべきである。

## 第四章 幼年期の特徴

### 第一節 作戲の時代

幼稚期に踏込んだばかりの兒童では、假に積木をして遊ぶとしても、單に其れを積み重ね、或は衝き崩すと言ふ活動以外には興味を有たないが、とかくする間に知らず識らず積み重ねた結果に眼を着けるやうになつて來る。活動其のものだけに興味を有つ時代は、其の生活が氣紛れであり斷片的であるが、其の結果に眼を着けるやうになると其れを中心として兒童の生活が統一される。そこで材料を遊ぶ動作に或物を組み立てようとする新しい見地が加はつて來る。しかし其の始めは組立てられる物が、家とか橋

とかと定つたものではなくて、單に材料を組立てた結果を觀て喜ぶに止る。かうしたことを反復して居る間に、兒童は物の性質に



構成的玩具

氣付いて來て、砂に水を加へて固め得ること、粘土で自由に形を造り得ること、竹片の弾力性のあることなどを知つて來る。此の經驗が兒童をして單に或物を作ると言ふだけでなく、特定のもの——竹片で弓を、粘土で牛や馬を、積木で家や汽車などを造らせるやうに仕向けるのである。

かゝる活動は、單に活動だけを目的とする遊戯の場合と稍趣きを異にし、或目的を達する爲の手段となつて勤勞の性質を帯びて來る。しかも其の目的は、或種の意味を擔つて居る。茶碗は飲食

物を盛る爲の物であり、箸は之を掴む爲の物である。或目的を達する爲の勤勞では、其の目的が他から課せられたか或は自己自身で立てたかに關係なく、常に其の目的に縛られて之に添ふやうに活動せねばならないから、其の活動を自己の勝手に變へることが出来ない。だから其の目的を遂げることは、兒童自身に取つてはなさねばならぬ一種の義務と考へられるやうになり、故なくして其の活動を中止し得ないやうにもなつて來る。かやうに義務を果すことが勤勞の本質なのである。すべて現實の生活が、意味の世界を造る勤勞の生活であり、文化を作為する作業の生活であると同様、積木で家を造り粘土で牛馬を作る兒童の活動にも、かゝる勤勞の性質が窺はれる。しかし一面また其の目的を果す活動其のものに、喜びと満足とを有つと言ふ性質も含まれて居るから、畢

竟其れは遊戯と作業の混血兒であり、遊戯から作業に遷る過渡の活動であつて、之を作戯と名づけることが出来よう。

かく遊戯に作業の性質が加つて來、客觀的に意味を擔つた作品を彼らの世界の中に見出すやうになることは、兒童發育の第三期を劃する一大特徴で、此の時期を幼年期と言ひ五歳から八歳に至る間が之に相當する。

嬰兒期の運動遊戯、幼稚期の錯覺的遊戯では、其の内容から見て始めも終りもないが、此の期の兒童の作戯では、必ず意味を擔ふ作品の完成を觀るまで、之に努力を集中して作業を繼續する。そして側から之を妨げたり何らかの事情で自ら中止せねばならなかつたりすることに、兒童は言知れぬ不満を感じる。かく活動の終始が其の目的によつて定められて、之を完成する爲に注意を集中

し努力を繼續せねばならぬ點で、作戯は大人の勤勞に接近して居る。しかし自己の造つたものを自ら破壊することのあるのは、單に結果だけが目的でないことを示すもので、やはり活動其のものも目的となつて居ることが知れる。是らの點から觀て、未だ幼稚期の遊戯の域を脱し切らぬものと言ふことが出来よう。

かゝる作戯を教育上の主要な手段として居るのが、幼年兒童に對する合科教授である。合科教授とは、學習に算術とか國語とかの分科を立てずに、作戯の時代にある兒童の生活を綜合的に指導しようとするもので、遊戯を學習的にし、學習を遊戯的にして行かうと言ふのである。フレイベルやモンテッソリの教育方法も、之を指すものである。幼稚園時代の後半は、兒童の活動が作戯に變つて來る時期であるから、其の取扱ひに就いても勤勞への萌芽



を擁護し育成するやう注意を拂はねばならない。

### 第二節 子供の諄聞き

物に話し掛け自然を人間化する時代には、凡てが自己中心で、自分が物に意味を與へて満足して居たので、どこまでも主観的であるが、経験を重ねるに従つて物から受ける抵抗に眼覺めて來る。手を取つて歩ませようとした人形が旨く動かなかつたり、馬のやうに乗らうとした犬が勝手に走り出したりして、自己以外の物が必ずしも自己の思ふやうにならぬことを覺えるやうになる。かくて此の期になつては、物を主観化・人間化することから漸次離れて、物を物として觀るやうになり、果ては生物と無生物との區別を知るやうにもなる。

かく自己の勝手にならぬ世界のあることに氣が付くと、そこに驚異を感じ出して其の秘密を發かうとするやうになる。此の期の兒童がよく「どこから持つて來たの」とか「どうして持つて來たの」とか、又は「誰が持つて來たの」とか言ふやうに發問するのは其の現れである。もつとも此の發問癖は、發達の第二期たる幼稚期に既に現れるが、其の頃の發問はどこまでも疑問を解決しようとする知的の要求ではなくて、聞いたり答へたりする活動其のものが目的なのである。其れは恰も遊戯に於て活動其のものが目的であつたのと同じで、發問も一種の遊戯である。であるから、其の間に單に答へてやればそれで満足する。しかし幼年期の兒童になると、發問に意味を有たせて來るので、思考作用が幼稚であるから發問が斷片的孤立的ではあるが、とにかく満足する答を得るまでは

次々と發問の箭を放つて止まる所を知らない。終には「諄聞き」と言ふ名のもとに大人から厭はれることにもなる。しかし兒童の發問癖は尊い智慧の芽生えであるから、單なる好奇心の現れとして顧みぬやうなことなく、其れを正しい求知心にまで生長させねばならぬ性質のものである。従つて之を諄聞きとして捨て去るべきではなくて、或る度まで満足させてやるやうにせねばならぬ。

### 第三節 社會的生活

幼年期になつて物を物として観るやうになると同時に、人間に對しても其の態度を變へて來る。曾ては友だちにしても自己の氣の向く間、自己の我の通る間だけ友だちであつて、徹頭徹尾自己

中心主義であつたが、幼稚期の終りから此の期に掛けては、漸く社會的になり、遊戯に仲間を求め、力ある兒童の指揮に服し、團體の規律に従ふやうになつて來る。此の動作の教育的價値に眼を着け

たのは、フレイベルの師である瑞西の教育家ペスタロチである。

ペスタロチは、一七四六年一月十二日チューリッヒに生れ、一八二七年二月十七日ブルックに逝く。



ペスタロチの墳墓

ノイホーフに於ける貧民の救助者、リーンハルト及ゲルトルートに於ける國民の宣教師、スタンツに於ける孤兒の父、ブルグドルフ

及ミューンヘンブクゼーに於ける新國民學校の創設者、イフェルテ  
ンに於ける人道の教育者、眞の人、眞の基督教徒、眞の市民。凡て人  
の爲に計り、自らを省みず」と其の墓碑銘にある通り、實に教育の權  
化と言はれる人である。

ペスタロチは、自己自身の法則に従つて發展する人間の自發性  
を以て自然の力とし、此の内部的の勢力を自然の順序に従つて發  
展させることを教育の目的としたのであるが、家庭的關係を人間  
に於ける第一の且つ最も著しい自然的關係であるとして、「父の家  
よ、汝は人間のすべての純粹なる自然的教育の基礎である。」と其の  
著「隱者の夕暮」の中で述べて家庭教育を高唱し、母の懷で培はれた  
愛と服従、感謝と信賴が良心の芽を發展させ、義務と正義の念を養  
ひ、進んで母の眼を信じたやうに神をも信じさせると考へた。か

くペスタロチは家庭を兒童教育の搖籃と觀たが、事實兒童は父母  
の行動を直觀して直に之を模倣するもので、彼らの一舉一動は實



孤兒院に於けるペスタロチ (グローブ筆)

に父母自身の姿の反映であることを  
思へば、其の言動を慎まねばならぬこ  
と今更述べるまでもないことである。  
ペスタロチは更に、「汝は地球上で唯  
自己一人の爲に生活して居るのでは  
ない。故に自然は汝をまた外部と關  
係させる爲に、外部との關係によつて  
教育する。」と言ひ、親心は支配者をつ  
くり、兄弟心は公民をつくる。兩者が家  
に於て及國家に於て秩序を産み出すのである。」と説いて、家庭に於

ける社會關係を重視した。人間は家庭に育ち、幼稚園や學校に人となり、社會に活動すると言ふやうに、終生社會との關係を離れては生存することが出来ないもので、知識を收得し技術を練磨するのも、感情を優美にし徳性を涵養するのも、畢竟自己活動が其の基礎をなすとは言へ、種々の社會關係に入り込むことにより、他から刺戟され暗示され教育されて、人間としての資格を具へ本質を發揮し得るやうになるのである。故に人は人なしには人となることが出来ぬもので、人間としての發達はすべて社會生活の賜であると言つても過言ではない。勿論個人があつて始めて社會も成立し、個人が發達して始めて社會も發達するものであるから、個人と社會とは分離して考へることの出来ない關係にあるので、此の點から觀れば個人の目的と社會の目的とは、其の根本に於て相一

致せねばならぬ筈である。であるから個人に於ては、社會の完全な一成員となることを目的としての發達を期すべきである。

かく人間は、社會關係を離れて生存し得ないのみならず、社會生活によつてのみ人間となることが出来るとすれば、ペスタロチが兒童教育上社會關係を重視し、社會の基礎たる家庭を自然的な教育所として尊重した意味も明かになるであらう。

## 第五章 小學校の教育

## 第一節 小學校の目的

幼年期は遊戯の生活から勤勞の生活に移る過渡の段階であるが、世界各國とも多く此の時期を以て學校教育の始期と定めて居る。我が國でも兒童が滿六歳に達した翌日から滿十四歳に至る八箇年を學齡とし、其の間に尋常小學校六箇年の教科を修了させる爲に就學せしめねばならぬ義務を、學齡兒童の保護者に負せて居る。

嚮に述べたやうに、之を個人の立場から考へれば、個人は社會の完全なる一成員となることを目的とすべきであるが、社會の中で

最も大であり、各種の團體を統制する絶大の權力を有つものは國家であるから、國家の完全な一成員となることが個人究竟の目的でなければならぬ。更に之を國家の立場から考察すると、國家は個人の自由な發展を擁護して之を遂げしめると共に、之を通して國家自體の文化を向上させて、其の存在の意義を全うせねばならない。従つて國家は其の内部を統制する爲に法を設けて、或は積極的に或は消極的に其の國民に遵守せしめることになるのである。殊に國民教育の程度如何は、一國文化の消長に大なる關係を有つものであるから、文明諸國は齊しく一定限度の教育を國民に要求し、之を義務として課して居る。しかし其の子を眞に愛すると同時に、國民としての義務の何たるかを知る親たちにあつては、國家の強制を俟つまでもなく、進んで愛兒を就學させ、其の教育

に心を致し力を盡すべきであらう。

畏くも明治天皇は、特に意を教育に留めさせられ、明治五年八月新に學制を頒布し、全國に統一的の教育制度を布かせられた。其の當時の太政官の仰被出書に、「自今以後一般の人民華士族農工商及婦女子必ず邑に不學の戸なく家に不學の人なからしめむことを期す。人の父兄たるもの宜しく此の意を體認し、其の愛育の情を厚くし、其の子弟をして必ず學に從事せしめざるべからざるなり。高上の學に至つては其の人の材能に任すと雖も、幼童の子弟は男女の別なく小學以下に従事せしめざるものは、其の父兄の越度たるべきこと」と誥げて、大に國民の教養を高めようとされたのであつた。

明治十二年九月學制を廢して教育令が發せられ、始めて義務教育の制が布かれたが、其の後現行の小學校令が發布され、明治四十年の改正で從來の尋常小學校四箇年の修業年限が六箇年に延長された。近來義務教育年限を更に八箇年に延長しようとの議さへあるやうになつて、普通教育は歐米の其れに勝るとも劣らぬまでに普及發達するに至つた。

明治維新は有史以來未曾有の大變革であつた爲、上下齊しく動搖するを免れなかつた。或は西歐の文明に心酔して國體の尊嚴を忘れる者があり、或は舊來の陋習を墨守して知識を世界に求めるの雅量を缺く者があつて、人心の歸するところを知らなかつた。此の時にあたつて、明治天皇は教育に關する勅語を國民に下賜されて、國民生活の歸趨を明かにされると共に、教育の大本を定められた。小學校令に、

小學校ハ兒童身體ノ發達ニ留意シテ道德教育及國民教育ノ基

礎並其ノ生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ授クルヲ以テ本旨トス(小學校令第一條)

と規定してあるのも、國民生活の究竟理想たる教育勅語の精神に基き、小學校教育の準據すべき方針を示したものに外ならない。

さて健全な身體を造ることは、あらゆる文化活動の出發點をなすものである。殊に小學校時代は身體發育の最も旺盛な時であるから、専ら之に留意して、正常にしかも健全な發育を遂げさせることが肝要である、國民體位の向上がやがて邦家將來の發展に至大の關係のあることは、こゝに委しく説くまでもあるまい。

次に、道德は人と人との關係を規正する則であつて、之によつて社會生活も可能になるのであるから、之を自律的に實行し得る人格を練り、其の根帯をなす徳性を養ふことは教育の中核をなすべ

きで、小學校令第一條に於て道德教育及國民教育の基礎の訓練を擧げて居るのは、小學校教育の中心が此に在ることを示すものである。たゞ道德教育から國民教育を區別して居るのは、かゝる自律的の人格を國家の一成員と見る立場から、國民生活の理解、國家觀念の養成並に國民的情操を陶冶すべきことを特記したままで、二者の内容に差異ある譯ではない。

なほ兒童が將來國家社會の一成員として活動する爲には、其の個性と境遇とに應じて、それ／＼職業を選び其れを通して全體としての文化に貢献することを義務とする。故に其の生活に必須な知識技能を修得させねばならぬ必要が起る。しかし將來如何なる方向に發展すべきかが未だ確定し得ない此の時期の兒童にあつては、其の兒童の個性に即しながら、しかも廣くあらゆる職業

の基礎となる一般的の陶冶を施さねばならぬのは勿論である。

### 第二節 學級の生活

學校は、家庭に於ける父母が一定の職業に従事して居るとか、教育の知識を缺いて居るとかの理由で、單に之に代つて教育する所であると言ふに止らない。國家が其の存立の目的を實現する爲に設け、又は設けしめるものである。勿論ペスタロチが述べて居るやうに、家庭での共同生活が國家社會の生活の基礎を築くのであるが、家庭は自然的な、しかも最も小さい社會で、ともすると父母の盲目的な愛情が小さい暴君を造つたり、交際の範圍の狭いことが、偏狹な利己主義者を造つたりしがちなものである。のみならず、家庭には社會に觀るやうな多種多様の生活様式が備つて居

る譯でないから、多方的な訓練が出来難い。そこで家庭以上の廣い社會に入込ませねばならない。學校が教育の場所として、家庭以上の意義を有つ所以がこゝにある。殊に學校では其の團體生活の秩序を保つ爲に、或程度の拘束的な規則を設けて意識的に之に服従させる。其れは國家の場合のやうに絶對的に強制しようと言ふのではないが、自然的な家庭とは其の趣きを異にして居て、寧ろ家庭と國家との兩性質を兼ね備へて居るものと觀ることが出来よう。もとゞ、學校は教育を目的として組織した共同生活團體であるから、其の施設も經營も共に具案的で、そこに他の教育機關と異なる特徴がある。

學校では學級を組織し、發達の程度の略等しい一定數の兒童を通常一人の教師に擔任させ、其の教育の全責任を負はせて居る。



學級生活の當初は兒童の間に未だ何等の親しみもないが、共に遊び共に學んで居る間に、互に名も知り合ひ、心も融け合つて、終に共通な思想が湧いて來る。かくて兒童各自の意識の中には、自分と言ふ觀念の外に、「僕らの教室」とか「私たちの先生」とか言ふやうに、「自分ら」と言ふ觀念が起つて來る。かうなると學級は、單に個々の兒童の集合ではなくて、其の成員が内面的に結合して、しかも其の總和以上のあるものが生れて來たのである。之を學級意識と言ふ。其れは恰も個々の樹木が集つて出來た森林に、個々の木に觀られない靈氣が宿るやうなものである。學級意識は學級と言ふ小社會の社會意識で、其の學級の成員たる兒童は常に之に左右される。勿論學級意識は其の成員たる兒童各自の意識を離れて存するものではないが、之が發達すると、個々の兒童が勝手に之を無視して

我儘をすることが出來なくなる。こゝまで發達した學級意識を學級精神と呼ぶ。學級精神は其の成員を支配し、成員各自の修養は學級精神を高める。學級意識を健全に發達させて學級精神にまで高める爲に、直接影響を與へるものは教師の人格と指導法とである。教師は外部から押附けずに、兒童相互の共同生活を内部から發展させるやうに導かねばならない。其の爲にはあらゆる機會を利用すべきであるが、其の中で最も重要なのは、學級内での學習と作業とである。

### 第三節 學習と教授

學校教育が幼稚園の保育と區別されるのは、勤勞を意味する學習を課する點にある。

兒童が社會生活に入込むことによつて、過去の文化を有意的に或は無意的に受入れて來ることを廣義に學習と呼ぶが、狹義には有意的に受入れることのみを意味する。學校での作業は此の狹義の學習である。學習訓練の目的は單に過去の文化を受入れるだけでなく、更に進んで自ら文化を創造する能力を養成するにある。文化の進歩が遅々たる時代には、教育は過去の文化を受入れるだけで足りたが、現代のやうに其の發展が急速になると、其れに處する道を講ぜねばならぬ。其れには學習の際に單に文化の内容を受入れるだけでなく、其れを受入れる方法態度を訓練して行かねばならない。かゝる方法態度の訓練が、やがて新しい時代に處する道を會得させると共に、自ら文化を創造する能力を涵養することにもなるのである。文化の内容を受入れる學習訓練を實

質的陶冶と言ひ、其の方法態度の訓練を形式的陶冶と言ふ。現代の教育思潮が注入劃一を斥けて、専ら兒童の自己活動を重んぜねばならぬと言ふやうに傾いて居るのも、自己活動を促して兒童自身に文化を受入れる方法態度を會得させようと言ふに外ならぬ。

學習をなさしめることを教授と呼ぶ。教授と言ふことの重要な要素をなすものは、教師と兒童との間に挾まる教材である。教材とは、兒童の自己活動を陶冶する爲に選擇された文化財である。すでに學習の目的が文化の内容を受入れることと、之を受入れる方法態度を養成することにあるから、教材選擇の標準も之の二方面から建てられねばならぬことは勿論である。

かくて選ばれた教材を、其の目的や性質によつて組立てたもの

を教科と言ふ。教科目の種類は、國民教育上最も重要であるから、特に小學校令に規定して一様に實施させることにしてある。

尋常小學校ノ教科目ハ修身・國語・算術・國史・地理・理科・圖畫・唱歌・體操トシ女兒ノ爲ニハ裁縫ヲ加フ

土地ノ情況ニ依リ手工ヲ加フルコトヲ得(小學校令第十九條)

高等小學校ノ教科目ハ修身・國語・算術・國史・地理・理科・圖畫・手工・唱歌・體操・實業(農業・工業・商業ノ一科目又ハ數科目)トシ、女兒ノ爲ニ

ハ家事裁縫ヲ加フ

土地ノ情況ニ依リ前項教科目ノ外、外國語其ノ他必要ナル教科目ヲ加フルコトヲ得(同第二十條第一項及第二項)

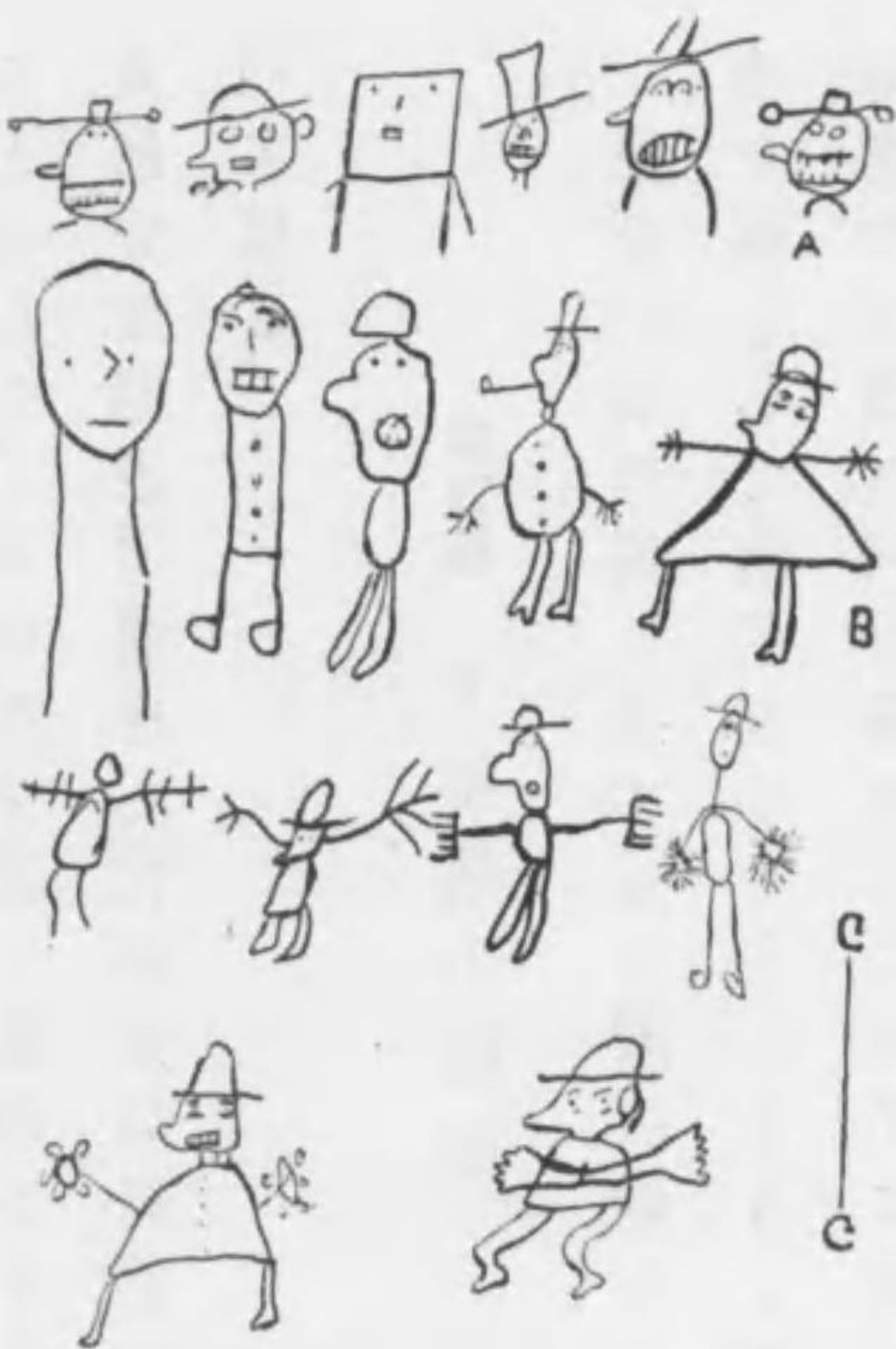
なほ教科の内容を更に具體的に規定し、兒童發達の程度に應じて之を各學年に配當し、教授時數を定めたものを教科課程表と言

ひ、小學校令施行規則中に掲げてある。實際に當つては之を基礎として教授細目を作り教授細案を編み日課表によつて教授することになる。其の際兒童に使用させる教科用圖書は、我が國では大部分文部省で著作した國定教科書によらねばならぬことになつて居る。

#### 第四節 少年期の精神

兒童が幼年期に達すると、漸次物を人間化することから離れて、物を物として觀て來るやうになると説いたが、此の時期の兒童は、事物や人間を何の關係もつけずに個々に引離して觀察するものである。そこで此の時期を實體期とも言ふ。其れが八歳から九歳にかけては、活動期と名づけられ、主として人間の活動や事物の

作用に眼を著けるやうになつて来る。次に九歳から十歳以後に  
なると、事物相互の空間的、時間的及因果的關係に注意するやうに



幼兒の繪畫……人物 (ビューレル氏)

A 頭 B 胴と脚 C-D 腕と手

味の方向によつて區分したものであるが、兒童の觀察の仕方や其  
の結果の纏め方によつて之を區分すると、事物を全體的に捉へる

なる。此の時期を關係期と呼んで居る。更に性質期と言はれるのは、事物の性質を分析して觀察する時期で、最も後れて發達する。以上は兒童の知覺の對象と其の興

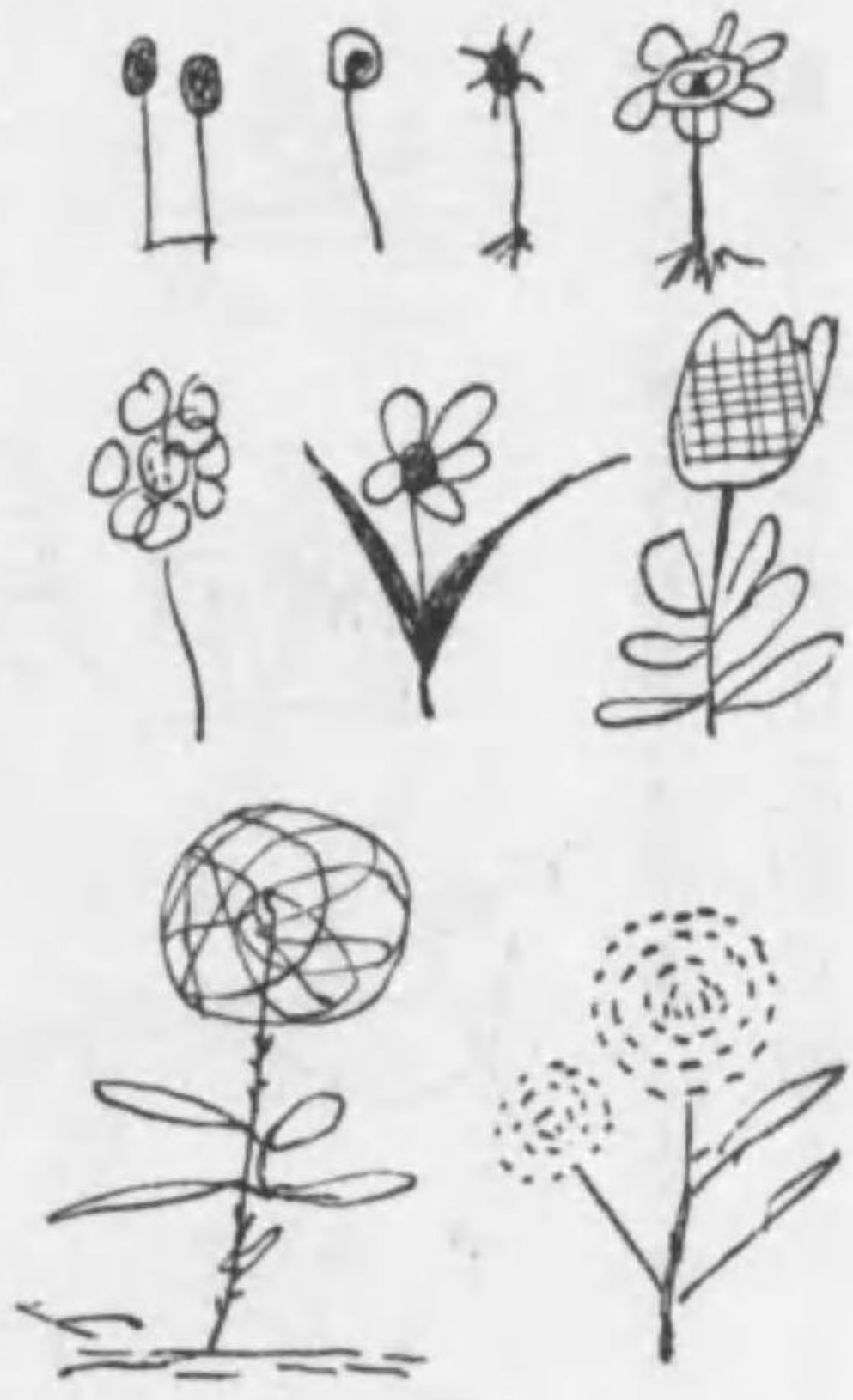
が、其の際特に目立つ部分に就いては十分に觀察して他を疎略にし、之を想像作用で補充して觀る想像的綜合の時期(約七歳まで)、次



幼兒の繪畫……馬や舟に乗れる人物 (ビューレル氏)

解して來る時期である。しかし實際に就いて兒童精神の活動を觀察すれば、是らが相錯綜して現れるもので、こゝでは著しい特徴

は想像を加へることなしに事物を客觀的に觀察するが、個々の部分を全體と關係させずに觀る分解の時期(約十二歳まで)、最後は論理的綜合の時期で、事物の性質を全體と關係させ、しかも客觀的に正しく理



幼児の繪畫…花卉 (ビューレル氏)

を掲げて指導する上の大體の目安を明かにしたまでである。

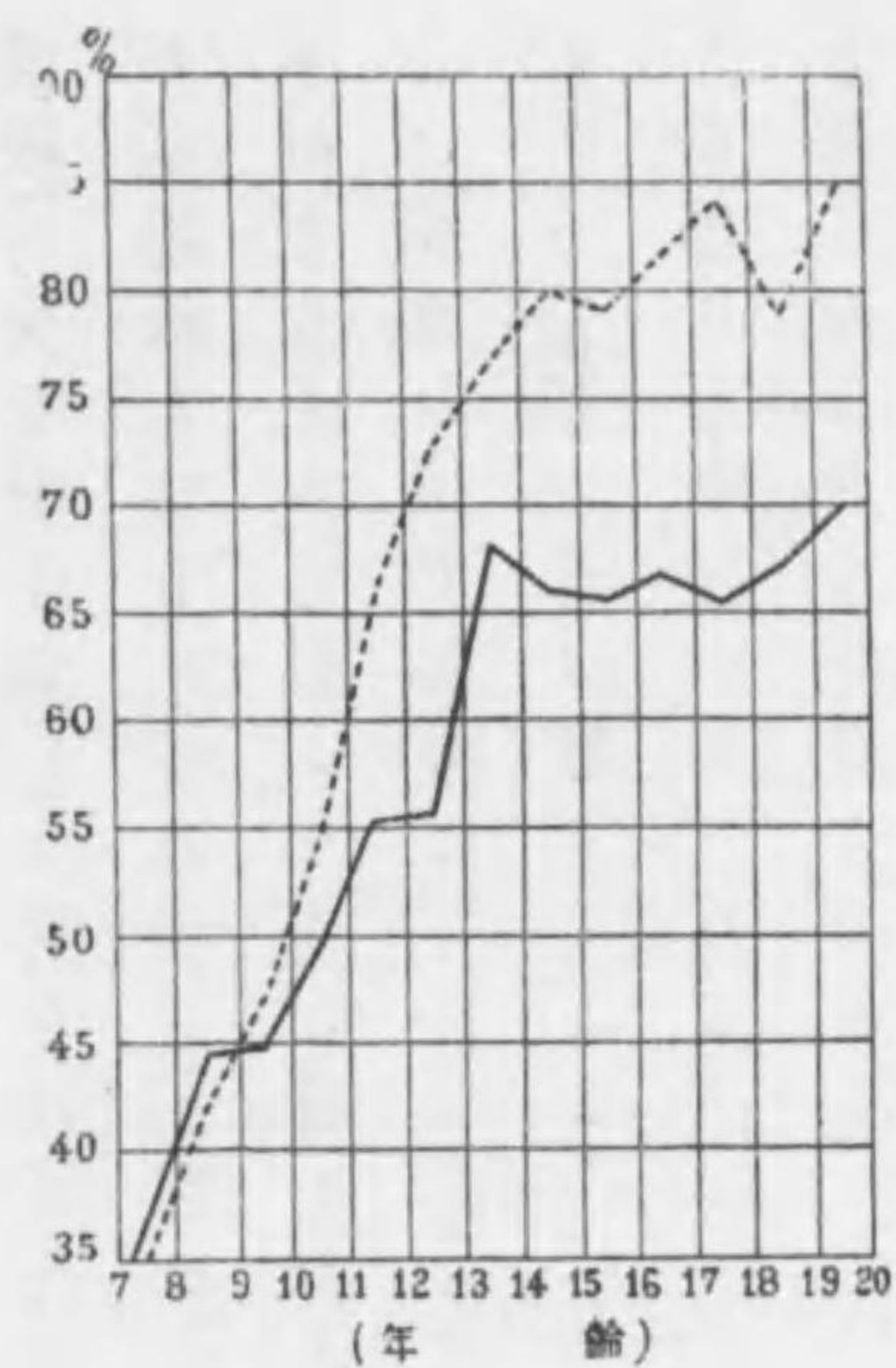
すでに述べたやうに、兒童が自分の勝手にならない世界を見出して、之に疑問を有つやうになれば、従つて之を解決しようとして來るやうになり、著しく思考作用が發達して來る。思考作用とは所謂考へる働きで、其のもとをなすのは判断する働きである。其れは「お母さんは好い人である」とか「私はお母さんのお使ひに行く」とか言ふやうに、お母さんと好い人、私とお母さんのお使ひとの間の關係を知ること、かゝる判断を繰り返すうちに、お母さんのみならず一般に當て

はまる「好い人」と言ふ觀念が出來て來る。かく多くのものに當てはまる觀念を特に概念と言ふ。故に判断は概念と概念との關係を認識する働きであるとも言はれよう。かうした判断を使つて、或種の疑を解き新しい答を得る作用を推理と言ふ。例へば、「あなたは何故お母さんが好きか」と問はれた時、「お母さんは好い人だから好きである」と言ふやうな答を得るやうなものである。之を正しい推理の型で現せば、

すべて好い人は好きである。  
お母さんは好い人である。  
故にお母さんが好きである。

と言ふことになる。かやうに概念によつて判断し推理する働きを思考と言ふ。

かゝる思考の芽生えは、すでに早く幼稚期に現れるが、幼年期から少年期(九歳から十三歳まで)にかけて著しい發達を示す。しか



記憶の發達 (スメドレー氏)

し此の時期の思考は、未だ嚴密な意味での概念によらずに、多く具體的な觀念を使つてなされるもので、抽象的に推理し得るやうになるのは青年期に入つてからである。殊に幼年

期の兒童などでは、推理すると見えて其の實、次々に憶ひ起す觀念の連續——聯想作用である場合が多い。

少年期に達すると、記憶する力も著しく進歩する。しかし俗に

言はれるやうに、大人より覚えが良いと言ふ譯ではない。覚え込むこと——銘記の力は此の期の終り頃までは發達が遅々たるもので大人に及ばない。其の代り一度學習したものは、比較的よく把持して居て容易に忘れない。三歳までに覚える知識の分量は、大學三年の學習より大であると言はれるのも、此の事實を誇張して言つたものであらう。長ずるに伴れて、銘記力が進んで把持力が減退する。大人になると一度學習したことも忘れがちになり、老人になるとすぐ忘れて仕舞ふ。

記憶には印象を與へられた儘に記憶する機械的記憶と、よく意味を理解して記憶する論理的記憶とがある。兒童は多く機械的記憶による。しかし大人に比して必ずしも之に長じて居ると言ふのではない。論理的記憶は判断や推理の發達に伴ふものであ

るから、年齢の長ずるに従つて進むものである。嚮にも述べたやうに、少年期は兒童の心の眼が殆ど外の物に向ふ時期で、内に悩みを有たぬ朗かな時代である。しかも此の時期の半頃から漸く童話の世界を離れて冒険談を好むやうになり、友を求めて終日戶外で活動することを好むやうになるが、之は内に漲る旺盛な生活力の現れで、其の活動は大人を凌ぐほどである。

#### 第五節 教科の性質

幼稚園時代の後半から小學校の初學年へかけての幼年期は、所謂作戲の時代で、勤勞への芽生えの時期であり、學習への過渡の時期である。とは言へ其れは極めて初心な原始的な生活であつて、朝夕金魚や小鳥に親しむけれども整つた理科の世界に住む譯で

はなく、一つ二つと數へはするが分化した算術の世界をうち建て  
る譯でもない。そこで此の渾然と統一して居る生活を破壊せぬ  
やうに指導して、家庭や幼稚園の生活との間に間隙を置くまいと  
考へた方法が、就學當初の合科教授であることは前に述べた。し  
かし此の遊戲的學習は畢竟本當の學習生活への橋渡しに過ぎな  
い。

元來學校の教科は、物理學・化學とか地理學・歴史學とか言ふやう  
な科學の分化に倣つて出來て居るものである。其の科學の分化  
は發達した人間精神の自然の產物で、それ〴〵固有の法則性を具  
へて居るものである。其れに倣つて出來て居る學校の教科も同  
様であるから甲の教科と乙の教科とは濫りに混同することを許  
されない。勿論幼兒の生活は渾然たる統一をなしては居るが、何

時までも此所に止つて居るものではなくて、其の發達に連れて、それぞれ分化して居る世界を分化して居るものとして觀ることも出来るやうになつて來る。學校の教科は之に應じ得るやうに出來て居るのである。故に家庭の生活から學校の生活に入つたばかりの時に、直に分化した世界に入込ませることは聊か無理であり、従つて合科教授と言ふ橋渡しを要することにもなるが、之を經過した後には分化の世界に入込ませねばならぬ筈である。況して學習の目的が文化の存續と發展とにある以上、なほ更のことである。

小學校の教科としての理科は、植物學・動物學・礦物學・生理學・衛生學・物理學・化學・天文學・地文學等自然科學の研究對象となる自然物や自然現象を一括して教材としたものである。單に理科のみに

限らず、すべて學習は疑問又は問題から始める。疑問のないところに知識の發展はない。理科では、兒童の日常生活に於ける自然物や自然現象に對する疑問が出發點とならなければならぬ。之を解決する第一歩として、實物や標本の觀察又は器械による實驗が使はれる。觀察や實驗では、正確にしかも精密に具體的事實を握る訓練が必要である。觀察や實驗で得た材料を基礎として、疑問や問題を説明することになるが、説明するとはそれらの結果を齎した原因を探ね、因果の關係をたどつて最後に一般の法則を立て、そこから個々の事象を眺めて疑問を解決することである。個々の事象の研究から一般の法則を見出して來る方法を歸納法と言ひ、其の爲に、

金銀銅鐵鉛等は熱によつて溶解する。



金銀銅鐵鉛等は金屬である。

故に凡ての金屬は熱によつて溶解する。

と言ふやうな歸納推理が使はれる。

小學校では尋常科第四學年から理科を課することに規定されて居るが、此の時期は恰も關係期に相當するので、事物を客觀的に觀察する時期であり、事物相互の因果的關係に注意する時期であるから、兒童心理の自然に順應した教科目の排列と言ふことが出來よう。

理科で取扱ふ知識は大概歸納的であるが、其の反對に演繹的に展開する模範的なものに、數學がある。演繹法とは一般の法則を個々の事象に當てはめて疑問を解決する方法で、すべて人は動物である。

太郎は人である。

故に太郎も動物である。

と言ふやうな演繹推理が使はれる。

數學では、一般に適用される公理や定理や公式から個々の問題が解決されるので、どこまでも論理的な學問である。しかし小學校の算術では、具體的な事柄から抽象的な數に到り、若干の實例から一般の法則を會得させると言ふやうに歸納的な順序を踏ませて學習させることが適當である。理科にしても算術にしても兒童の日常生活を出發點とし、事物現象を直觀させ實驗させ實測させて、其の方法に習熟させると共に其の結果を合理化するやうに仕向くべきで、「具體から抽象へ」と言ふ教授の原則に従はねばならぬのは勿論である。

次に修身・國語・歴史等の教科では、兒童が體驗したことを基礎として、其の意味を捉へさせ理會させねばならないものである。和氣清麻呂の事蹟に對する時、兒童は内部に於ける善惡の價値體驗を本として、之に同情し其の心情に共鳴する。之に反して道鏡を憎惡し之を嫌忌する。故に理科や算術のやうに冷靜な論理によるのではなくて、寧ろ自我の中核をなすとも觀られる情意が専ら活動するのである。故に之を練ることによつて、兒童の人格を高め、廣め深めることが出来る。反對に人格が向上するに従つて、理會が高まり廣まり深まることにもなる。是らの教授では常に自己に固執せず、不偏不黨の正しい立場から理會させる訓練が必要である。前述のやうに理會の基礎をなすものは體驗であるから、國語などの理會では實體期・活動期・關係期・性質期等に於ける心

意の活動に順應し、之を發展させることを忘れてはならない。

小學校の地理科は單に山や河などの自然を知らしめるだけでなく、それらの自然の上に現代人が如何なる文化をうち建てて居るかを理會させる教科である。

更に唱歌・圖畫・手工等の技能科では、表現の前に直觀がなければならぬので、自然や藝術品などを直觀し鑑賞することによつて、表現しようとする動機を誘發すべきである。たゞ此の教科で注意を要することは、眼と手、頭と腕とを並行して發達させねばならぬことである。其の爲には十分な練習を必要とする。

### 第六節 教授の方法

教授の方法は既に略述したところによつても明瞭であるやう

に、兒童の發達程度により教科の性質によつて一樣ではないが、兒童の學習活動には一般に通ずるものがあるから、之を指導する方法の上にも共通の形式を見出し得るであらう。

學習の目的は主として文化の受容にあるとは言へ、受入れようと言ふ氣——學習しようといふ意志なしには不可能なことである。そこで之を喚起することが教授の出發點をなすのである。が、單に其れに止まらず、作業中始終此の意志が兒童に漲つて居なければならぬ。かゝる意志を振ひ起して新しい教材を受入れることの準備をなす段階を豫備と名づける。獨逸の教育學者ヘルバルト(1776—1841)の後を受けた學者たちが、新觀念を受入れる基礎とする爲に、舊觀念を喚び起すことを豫備と言つて居るが、新觀念に促されて舊觀念を憶ひ起すこともあるので、舊觀念だけを

先に喚び起して置くと言ふやうなことは、寧ろ不自然であるのみでなく不可能と言つても宜い。

かく學習しようと言ふ意志を喚起して後始めて認識や理會が行はれる。其の爲には分解してみることも綜合して考へることも必要であり、比較することも概括することも必要である。たゞ理科などに於ける比較や綜合は、共通點を見出す爲のものであるが、歴史などでは特殊な點を發見する爲の手段である。かゝる爲に材料を與へ其れを同化させる段階を提示と言ふ。

最後にかくして出來た力を、自己の生活の各方面に利用して、或は制作し或は實行し、更に新なるものを思考すると言ふやうに、外部への發動を指導する段階を應用と呼ぶ。

右に掲げた豫備、提示、應用の三段は、教授の一般的な形式を擧げ

たに止まるので、兒童の發達と其の時の心意活動の如何並に教科教材の性質によつて變容されねばならぬことは、最初に述べた通りである。しかも外觀上或る時は教師が主となつて働くことがあり、或る時は兒童が主となつて働くことがある。更に教師兒童共に働くこともある。之によつて様々な教授の様式——教式が生れる。實物・繪畫標本などを示して、兒童の直觀に訴へ、其の觀察の仕方を指導する示教式、技能の教授に於て教師の模範に倣はせる示範式、直接兒童に經驗させ得ない場合教師の論述による説話式(講演式)などのやうに、兒童にとつて受身の教式があり、教師と兒童とが發問し應答して教授を進める問答式、兒童相互の研究を指導する討議式、課題を提供して兒童自ら解決させ、教師は兒童の學習の終りを受けて補正し評價する課題式などのやうに、兒童にと

つて能動的な教式がある。しかし何れにしても、内面的には教授は問題を以つて始まり、兒童と教師の共働によつて之を解決することに終るものである。其の間に、兒童は更に學習しようと言ふ意志を強められ、興味を喚起され、文化の受容と創造の力とが養はれるのである。

### 第七節 訓練の目的

教授では、文化を受容したり創造したりする方法態度が練られねばならないと言つたが、其の中核をなすものは、價值あるものを純一に憧れ求める根本的な意志である。其れには兒童をして學習にエネルギーを集中させ、目的遂行の爲には内外の障害にうち克つだけの抵抗力を有つた堅固な意志を作らねばならず、どこま

でも良心の命令によつて行動する正しい意志を練らねばならない。さうした意志を涵養することを訓練と呼ぶならば、教授と訓練とは決して離し得ない教育の方法でなければならぬ。

正しき意志、堅固な意志は單に學習に於て必要であるばかりでなく、之は實に人格の中心要素をなすもので、人は常に此の意志によつて一切の本能や衝動を規正し統一して、始めて善と言ふ道德的の價値を其の行動に現すことが出来るのである。かゝる行動の習慣を道德的品性と言ふ。訓練の目的はかゝる道德的品性の陶冶にある。

本能や衝動は人間活動の原動力であるから、之を刈取つたり枯したりすべきではない。と言つて其の儘で發動させることも出来ない。何故なれば之は盲目的な活動で饑うれば食ひ渴けば飲

むだけだからである。かくては動物の行動と何等選ぶところがない。しかし人間には「渴しても盜泉の水を飲まず、熱しても惡木の下に宿らぬ」ところの知見がある。盲目的な本能や衝動に、眼を開かせ正しい方向を指示するものは意志である。意志は、意志自らかうせねばならぬと言ふ法を立てて本能を導いて行く。かく自己自身に法を立て、自己自身で遵ふと言ふ自律性が意志の本質であり、且つ自由の眞義でもある。しかも意志が自己自身に立てる法は、「之ヲ古今ニ通シテ謬ラス、之ヲ中外ニ施シテ悖ラス」と言ふやうなものであることを理想とする。

さて、正しく且つ堅固な意志を持する爲に障害となるものは、誘惑と脅威である。しかし誘惑に陥り脅威に屈するのも、畢竟するに本能・衝動だけに委すからである。されば私利私欲に動かされ

ず暴力や權勢に脅かされずに、ひたすらに良心の叫びだけに聽くと言ふ自由な態度こそ訓練の極致でなければならぬ。そこで自制自治、自重自尊を訓練の眼目として指導すべきであると言ふことになるのである。

#### 第八節 意志の發達

訓練の目的は、自律的な意志の確立にあることは前述の通りであるが、幼兒にあつては、自ら獨立に規範を立てて其れに従ふなどと言ふことは頗る難しい。彼らは多く本能や衝動で動き易い。が其の初めは他律的で、父母の愛に信賴し教師の權威に服從して行動する。かゝる他律的な行爲では、道德的の規範を代表する父母や教師の命令に従ふので、之がやがて客觀的な規範に服從するやうになる前階梯をなすのである。

兒童の本能や衝動には、主我的(利己的)自愛的なもの、社會的愛他のなものがある。主我的衝動は自己主張の衝動で、四歳位ですでに發現する。愛他的衝動は他と一體とならうとする衝動で、同情となつて現れ、道德の基礎として甚だ重要なものであるが、其の半面には嫉妬猜忌憎惡などの反情となるところの危険性も潜在で居る。

兒童は就學前は勿論、就學後にも主我的衝動が主として働く。しかし他との交際によつて社會的衝動が發現して來ると、自己を主張すると共に他の主張も入れ、共に其の要求を充たさうとする。たま／＼利害相反する場合には兩者の間に争ひが起るが、其の際之に判決を與へるものは、交友間の習慣、父母教師の教訓、社會の傳

統などである。かうしたことに度々遭遇すると、児童は自ら衝動を統御することを覚えて来る。なほ傳統的な社會の慣習の如き客觀的規範に服従しつゝ、行動して居る間に、各種の慣習の間に矛盾や撞着のあることにも氣が付き、單に傳統にのみ従つて居ることの不合理をも意識し出して、終に自證による道德的規範に聽従するやうになる。かくして他律より自律へと轉向して來ることになるのである。

そこで訓練に於ても「他律から自律へ」と言ふ標語が昔から使はれて居る。しかし他律と言つても、強ひて父母や教師の權威に服従せしめよと言ふ意味ではない。出来るだけ児童の自發活動を促して、進んで父母や教師の模範に倣ふやうに仕向けることが訓練の要諦である。其れには父母や教師が自ら範を垂れることが

大切である。行ふものの中にあつてのみ行ふことを學ぶ。家庭に於ける父兄母姉の責務の重く且つ大なることは事新しく説くまでもあるまい。

さて、児童はどこまでも自律的に仕向けねばならぬが、其れはどんな非行でも看過せよと言ふのではない。たゞそれらに對して何らかの處置に出ねばならぬ場合でも、其の行爲の動機や意味を出来るだけ児童の立場から十分考察して、方法を誤らぬやうにせねばならない。命令し禁止するのも賞讃し課罰するのも、すべて訓練の手段に過ぎないので、命令や禁止によつて児童を機械的にしたり、褒賞や課罰によつて功利的にしてしまつたりすることは慎まねばならない。殊に父母や教師の無理解から、児童を卑屈にしたり、反抗心を起させたりすることがあつては、折角の訓諭も懲

罰も無意味になつて仕舞ふ。かくて兒童に對しては寛嚴宜しきを得ねばならぬと言はれるのであるが、峻嚴に過ぎるよりは寧ろ寛大であることに誤りが少ない。

第九節 訓練と個性

本能や衝動の發現には必ず情緒が伴ふものである。情緒とは喜怒哀樂や同情憎惡のやうに、自他の利害に關係して起る複雑な精神現象で、身體諸機關に大きな影響を及ぼす。例へば恐しい時には顔が蒼白になり冷汗が流れ、嬉しい時には手を振り足を踏みならずやうなものである。之を表情と呼んで眼や口に著しく現れる。其れが兒童に於て特に甚しい。

情緒は人によつて其の表出に遅速強弱があるばかりでなく、其

の持続性にも差異がある。古來氣質と呼ばれるのは、是らの諸性質の結合による諸相に名づけたものである。至つて快活ではあるが、輕卒で忍耐力に乏しいのは多血質の兒童である。之に反して常に憂鬱であり、しかも同一感情に支配され勝ちで厭世的悲觀

	強	弱
速	胆汁質	多血質
遅	神經質	粘液質

的の傾向を帯びては居るが、觀察が緻密で想像や思考の力の秀でて居るのは神經質の子供である。短氣で怒り易いが

舉動が活潑で勇往果斷の氣象に富むものは胆汁質の子供である。之と反對に感情に動かされるものが少く頗る冷靜ではあるが、活氣熱心に乏しく、頭が鈍くて動作も緩慢なものは粘液質の兒童である。しかし一般に幼兒は多血質的であり、青少年期は神經質的である。更に壯年期は胆汁質的であり、老年期は粘液質的である。



其の外男女の相違、民族の如何によつても、差違のあることは明かな事實である。

單に氣質の差異だけでなく、あらゆる點に於て人は十人十色である。強情な兒童があり氣弱な兒童がある。同じく強情と言はれる中にも、意志の強い爲のものと薄弱な爲のものがある。又粘りの強い兒童があり厭き易い兒童がある。決斷の速い兒童があり逡巡狐疑して居る兒童がある。或は保守的なのがあり進取的なものがある。かく各々異つた個性の持主に對する父母や教師の態度は、決して一樣であつてはならない。其れは教授に於けるよりも尙一層個別的でなければならぬ。そこでそれ／＼の性質に應じて、甘やかさず畏怖させず、反抗させず自棄させず、自然に個性を發露する間に自ら正しい方向をとらしめるやうに導くべきである。

何れにしても兒童の生活は其れを生活させることによつて訓練せねばならぬのは勿論である。飲食・睡眠・遊戯・清掃・作業等家庭と學校とを問はず、あらゆる訓練の機會を捉へて良習慣を養成せねばならぬが、此の際兒童をして單なる習慣の束とならしめないだけの注意が肝要である。なほ訓練上の不統一は種々の惡結果を招くものであるから、家庭と學校とは密接な連絡を保つて教育の方法に矛盾や齟齬のないやう力めねばならない。其の爲に父兄は度々學校を參觀し、教師は再々家庭を訪問して、互に意思の疏通を計る必要がある。學校が父兄會や母姉會を催すのも一に其の爲である。

## 第十節 身體の養護

兒童身體の發育に就いては既に述べた。普通教育では、其の發達に留意して身體各部の均齊な發育を遂げさせ其の機能を完全にし、健康と活力を増進させて内外の影響に對する抵抗力を強め、全身の運動を鍊磨して正確機敏な動作の出来るやうにすることを目的とすべきである。之がやがて一般文化建設の基礎を鞏固にする所以である。しかも兒童自ら自覺的に身體を尊重し、自主的に其の鍛鍊を圖るやうに仕向けることが養護の上乗である。身體養護の方法には、自然の發育を保護する消極的方面と、之を鍛鍊して活動に習熟させる積極的方面とがある。消極的方面で、特に家庭に於て注意せねばならぬのは營養と睡眠である。

營養は身體の發育に直接至大の關係があるものである。食物の攝取に就いては質に於ても量に於ても出来るだけ自然(本能)の導く儘が良い。人爲的な美味の刺戟により徒らに味覺を發達させて、自然の食欲を害はぬやうに心掛けねばならない。人爲的な本能の攪亂、時を選ばぬ間食の習癖並に兒童相應の運動の不足等が、食物に就いての我儘を醸し好惡偏食の癖をつけることになる。飽食・間食・早食は胃腸を虐待するに過ぎない。しかしあまりに食物に就いて干渉すると、胃腸の抵抗を弱めたり、他人の家で秘密に食つたり、或は食物に對して卑しくなつたりするから、常に自然に従ふことによつて、ゆつたりとした氣持で之に對するやうにしたいものである。

貧困な兒童に營養分に富んだ食物を與へようとする慈善事業

から、ひいて一般兒童にまで及ぼして一様の食事を供給する學級給食の制は、英國に端を發して漸次各國に擴つたものである。此の制度では廉價に營養分を供給し得ること、従つて國民の健康増進に役だつこと、貧富の子弟共に同一の卓を圍んで愉快に食事を採り得ることなど、教育上社會政策上有效な施設とされて、本邦でも都會地の學校などで採用されて來た。

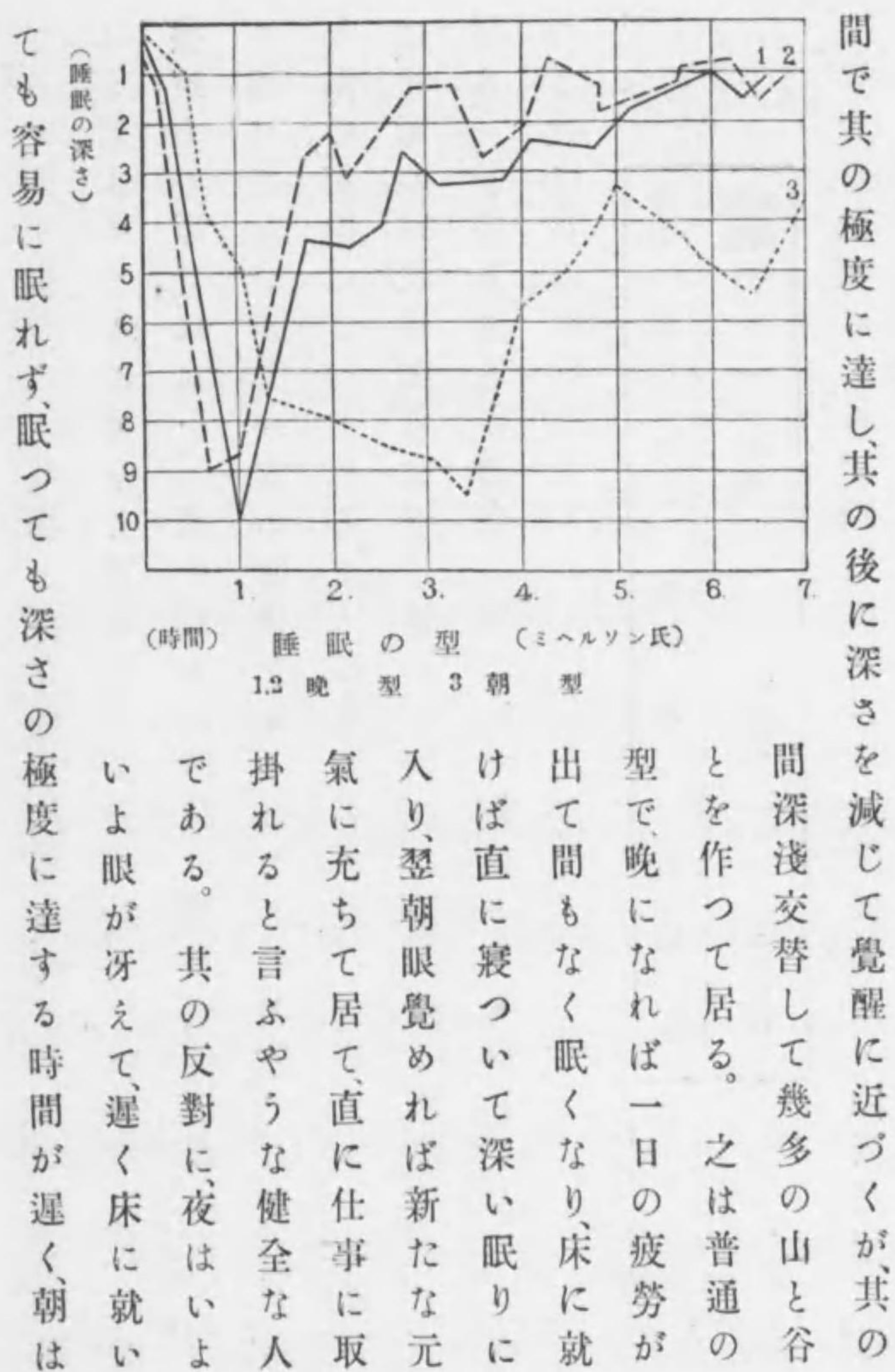
次に睡眠は最も重要な休養の方法で、よく眠る子は丈夫だと言はれて居るが、兒童保健上決して閑却することの出來ぬものである。數十日絶食しても生命を保ち得るさうであるが、二三日の睡眠不足は非常な影響を心身に及ぼす。

さて一日の疲勞を回復し、新たな元氣を養ふ爲にどれだけの睡眠時間を要するかは、必ずしも一樣には行かない。一晝夜を三分し

て、八時間を勤務に、八時間を飲食・娛樂・休養に、残りの八時間を睡眠にと云ふやうなのは、全く常識的の區分に過ぎないので、何らの根據がある譯ではない。其の長さは睡眠の型や疲勞の程度によつて同じでないから、一定の標準を定めることは困難であるが、大凡年齢の相違によつて異なることは事實である。そこで多くの學者は、兒童の睡眠時間の實際に就いて調査して大體の標準を立てて居る。著者も實地の調査に現はれた結果よりも少しく多く見積つて、次に其の標準を示すことにしよう。

睡眠時間	學年
一一時間	尋一—尋三
	尋四—尋六
一〇時間	高等科
九時間	

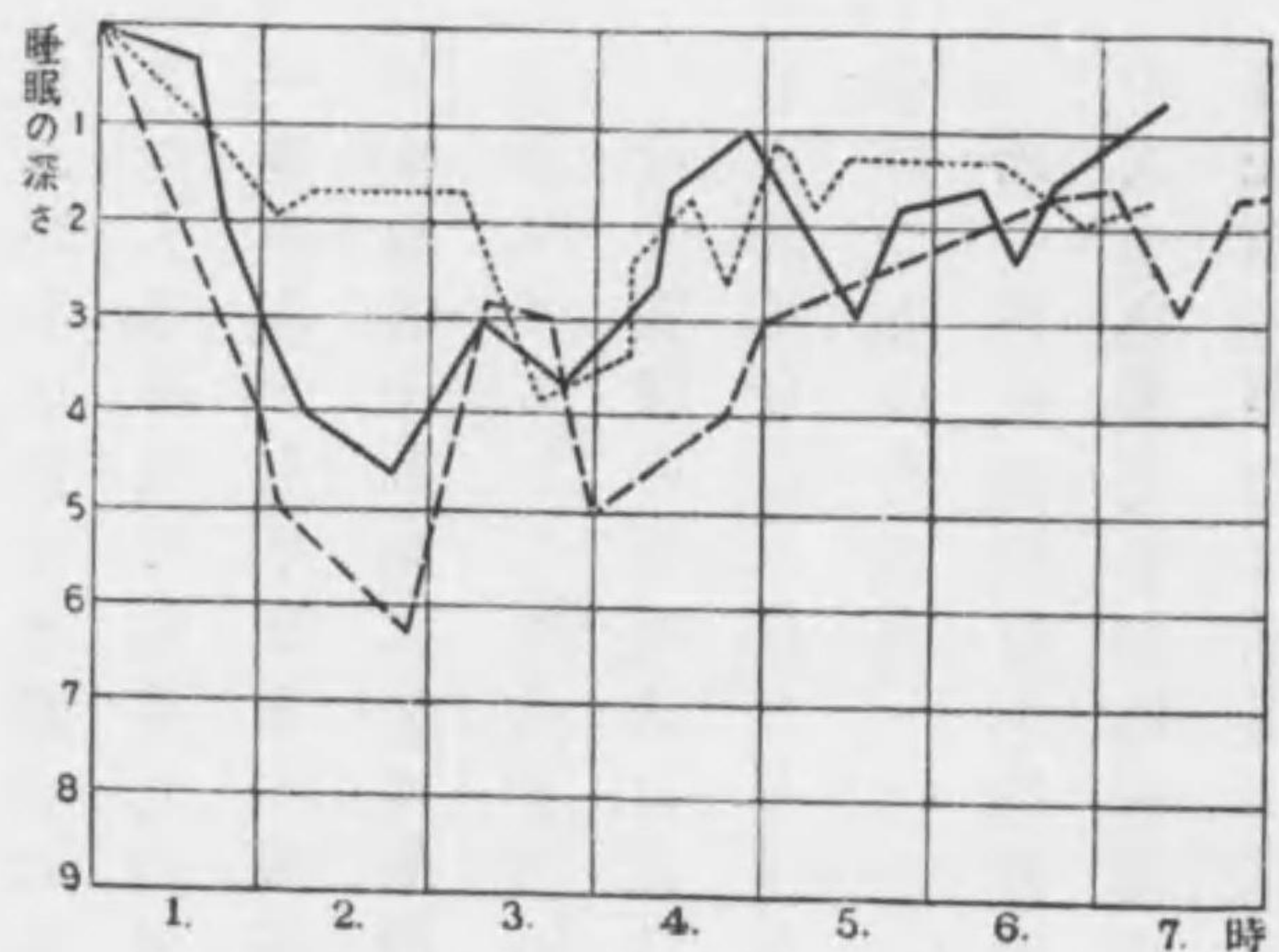
學者の研究によれば、睡眠の深さは就眠後大凡一時間乃至二時



睡眠の型 (ミヘルソン氏)  
1. 2 晩型 3 朝型

間で其の極度に達し、其の後に深さを減じて覺醒に近づくが、其の間

寢覺めが悪く起き出ても仕事に氣乗りがせず、午後になつて



神經衰弱者の睡眠 (ミヘルソン氏)

漸く油が乗りかゝると言ふやうな人もある。前者を晩型と名づけ後者を朝型と呼ぶ。神經質の人に多く朝型を見るが、神經衰弱者の眠り方が朝型の人に近いのは注意すべきことである。  
晩型の睡眠が健全であるとするれば、兒童にはなるべく早寝の習慣を作らせることが肝要である。兒童の睡眠不足は多く就寝時刻の遅過ぎること起因する。普通夏は午

後八時其の他の季節には七時半位までに就寝させる習慣をつけることは容易であらう。兒童は睡眠中に太りもし伸びもするものであるから、早寝させて自然に覺めるまで十分に眠らせる工夫をせねばならぬ。なほ翌朝眼覺めると同時に床を離れさせる癖を養成することも大切である。

身體養護の積極的方面は、正課の體操、各種の作業、自由な遊戯を始め、遠足、登山、水泳などで、是らは何れも兒童の身體を鍛鍊するに役だつものである。

此の外校舎の位置、構造（彩光、通風）、机、腰掛、黑板、其他校具や教具の大小色彩等の如何、課業時間や休憩時間の長短、家庭作業の如何等兒童の發育に關して注意せねばならぬことが少くない。殊に普通學校病と言はれる神經衰弱、視力障礙、脊柱彎曲等から、十種傳

染病は勿論百日咳、流行性感冒、流行性耳下腺炎（おたふく）、風邪、風疹、水痘等に至るまで、それ／＼常に細心の注意を怠つてはならない。近頃身體虚弱な學齡兒童を收容する爲に、林間學校、海濱學校、其他各種の特別な施設が講ぜられるやうになつた。是らは兒童養護上極めて必要なことであるから、今後益普及發達させねばならない。

### 第十一節 卒業後の方針

義務教育の後を受けて、更に一步を進めた普通教育を施すものは高等小學校である。普通教育では一般的の陶冶が主となることは勿論であるが、基礎的の陶冶だけで學校教育を終る大多數の子弟には、其の中に職業的陶冶を加味する必要がある。しかし此

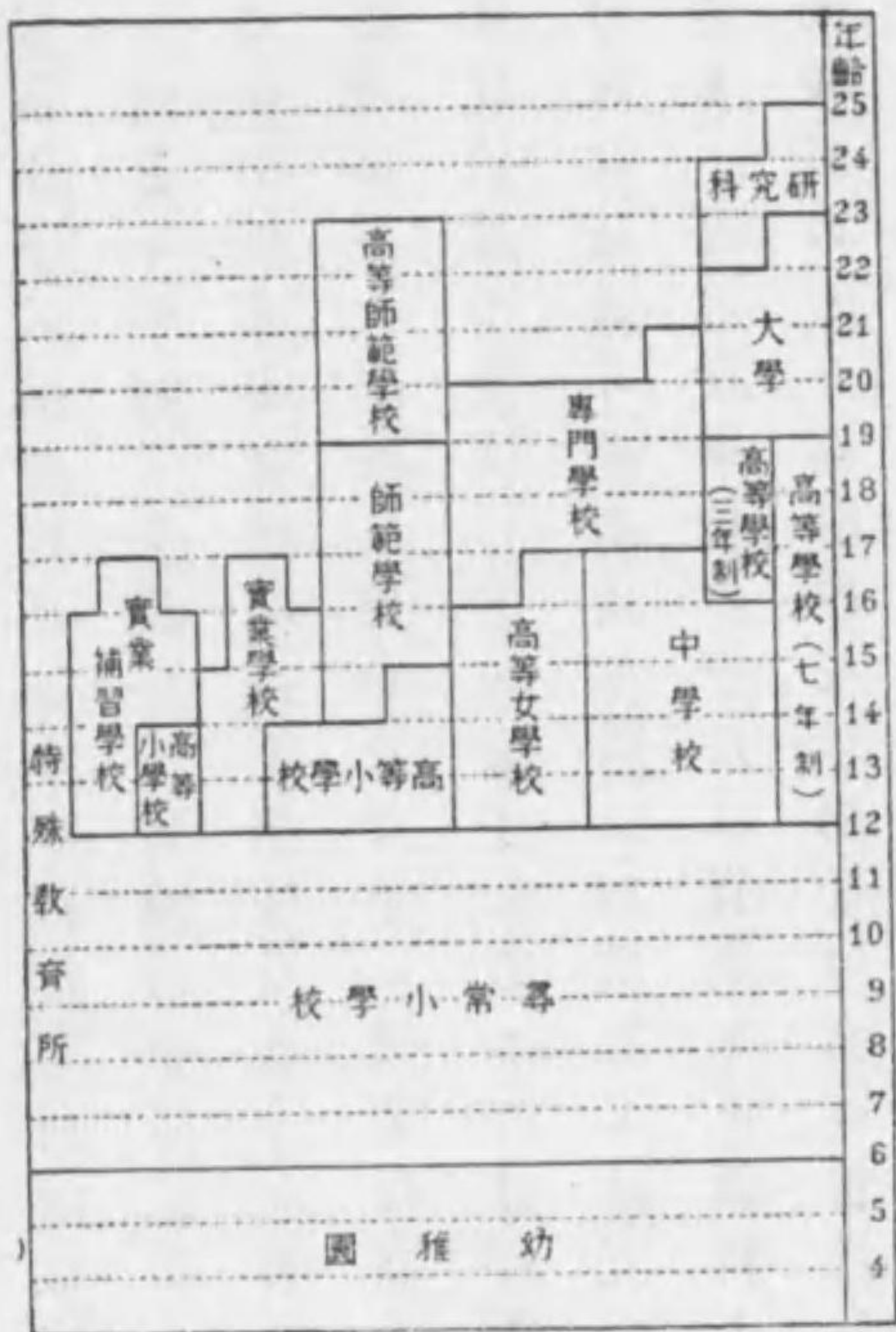
の場合の職業的陶冶は、特殊の職業に對する準備教育をしようと言ふのではない。如何なる職業にも通ずる身體的・精神的陶冶——勤勞に習熟させるとか職業に對する忠實・勤勉の良風を涵養するとか言ふやうな方面——が行はるべきである。高等小學校の教科目中特に實業や家事を加へ、之に關する普通の知識技能を得させる外、農業では其の趣味を長じ、勤勉・利用の心を、工業では勤勉・綿密にして且つ創作工夫を重んずる習慣を、商業では勤勉・敏捷にして且つ信用を重んずる習慣を養はうとし、家事では其の趣味を長じ兼ねて節約・利用・秩序・清潔の習慣を作らうとするのも右の意味で、職業的陶冶を加味した普通教育を施さうとして居ることが分る。

尋常小學校又は高等小學校の卒業生或は之と同等以上の學力

ある者を收容して、曾て學んだ事柄を一層確實にし且つ深化すると共に、一定の職業に對する知的・道德的・國民的の陶冶を施す爲に尋常小學校補習科・高等小學校補習科或は實業補習學校がある。

尋常小學校に引續いて普通教育の正系をなすと觀られるものは、中學校・高等女學校・高等學校及高等女學校高等科である。中學校及高等女學校は男子及女子に須要な高等普通教育を授け、特に國民道德の養成に力め、女子にあつては婦徳の涵養を目的とし、中學校は五箇年、高等女學校は四箇年又は五箇年を修業年限として居る。高等女學校の中には實業を正教科として置く實科高等女學校がある。高等學校は男子の高等普通教育を完成するを目的とし、特に國民道德の充實に力むべき所で、修業年限は七箇年を原則とする。高等學校尋常科は中學校に相當するもので修業年限

は四箇年、高等科は文科・理科の二科に分れ修業年限は三箇年である。尋常科を有たない高等學校は中學校第四學年修了者を收容



我が國の學校系統

する。高等女學校に高等科を置くことが出来るが、之は修業年限二箇年若くは三箇年で男子に於ける高等學校と等しく精深な程度で高等普通教育

をなす所である。

中學校と並行して、特殊の職業教育に一般的陶冶を加味して施

す所は、各種の實業學校である。其の履修する實業の種類によつて、農學校・工業學校・商業學校・商船學校・水産學校等に分けてある。中學校卒業者又は之と同等以上の學力ある者を收容して、一段高い職業教育を施すものは、高等農學校・高等工業學校・高等商業學校・高等商船學校等の實業學校である。

なほ高等の學藝を授けるを目的とする醫學專門學校・外國語學校・美術學校・音樂學校等の專門學校もある。是らは何れも中學校高等女學校等の卒業者を收容し三箇年以上の教育を施す所である。

更に國家に須要なる學術の理論及應用を教授し並に其の蘊奥を研究させることを目的とする最高學府は大學である。大學は法學・醫學・工學・文學・理學・農學・經濟學・商學等の各部に分れて居るが、

是らの數學部から成る綜合制を本體とし、別に一箇の學部から成る單科大學も認められて居る。何れも高等學校卒業者を收容する。

是らの外小學校教員養成を目的とする師範學校、中等學校教員養成を目的とする高等師範學校がある。

なほ心身の發達の不完全なもの、或は欠陥のある者——不具兒、聾啞兒などを收容して、特殊の教育を施すことを目的とする學校に盲學校、聾啞學校等の特殊學校がある。其の外精神薄弱な兒童を教育する低能兒學校、不良少年少女を收容して教育感化を施す感化院等があるが、是らは凡て教育の機會均等と個人の福祉とを保護する爲の施設で、近來益發達するを見るのは欣ばしい現象である。

小學校卒業後中學校に入學させるか、實業學校に入學させるかは、兒童の體質・個性の方向・家庭の事情等によつて定むべきで、單に親たちだけの好惡などで左右すべきではない。中學校や高等女學校の卒業後に就いても、之だけで止めるか更に上級の學校に入學させるか、入學させるとすれば如何なる學校を選択させるかも右と同様である。

上級學校入學の爲の準備として過度の勉強を強ひ、かよはき兒童の神經を昂らせ身體を衰弱させるなどは慎むべきことで、寧ろ日常學習の指導に意を注いで、準備の爲の準備などを退けねばならない。小學校にせよ中學校にせよ、其れ自身完結した教育を施すべき場所で、上級學校に進むべき資格を認められて居る以外に、獨立の意味を有つて居ることを忘れてはならない。



## 第六章 青年期の心理

## 第一節 精神の嵐

青年期の初期(十三・四歳頃)から身體各部は著しく發達して來て、聲音が急に變化し筋力が漸次増加し、兩性の特徴が眼立ち諸種の遺傳的資質が明瞭に認められるやうになつて來る。

少年期には兒童の眼が殆ど外物にのみ對つて居て精神が頗る朗な時期であるが、青年期になると、生理上の一大變化と共に精神上の變化も起り、其れが原因となつて眼を内に轉向して來るやうになる。そしてそこに何か充たされぬ或るもののあることに氣が付く。しかし其れが何故であるかを意識しない。故に絶えず

孤獨を感じ寂寥に惱まされて、常に不快と不安に襲はれる。従つて少年期の無邪氣さが失はれて落着きが無くなつて來る。何を見ても氣に入らぬから、あらゆるものに盲目的に反抗し、あらゆるものを破壊したがつて、執拗になり粗暴になり不規律になる。親の眼からは何時までも子供に見えるが、此の期に足を踏み入れた兒童は、親にも教師にも頼らうとしなくなる。さりとして自分の悩みを自分で解決し得る力も勇氣もある譯ではない。故に彼らは他に對して戦ふと共に、自己に對しても戦つて居るのである。そこで此の苦しい状態から逃れようとする。逃れることが出来れば、何か何所かに待つて居るやうに考へる。そして未來に希望を抱いて新しいものに憧憬を有つ。であるから常に空想に支配され易くなり、一寸した事が彼等を愉快にしたり悲觀させたりし

て、情緒を統制することに頗る困難を感じさせる。自分でさへ自分が不可解であるのに、大人の無理解を難じ、外からする教訓や學校の規則などを凡て自分を束縛する爲に出来て居るかの如く考へる。ひとり同輩の間だけでは語ることも爲すことも自由であるから、知らず識らず同氣相求める。しかし必ずしも正しい友だちの選擇が行はれる譯ではない。従つて離合常なき有様であるが、其れにも拘らず彼らの行動を左右するものは、親や教師の批判ではなくて、同輩間の其れである。であるから彼らにとつて最も苦痛であり不名譽なものは、同輩からの仲間はずれである。そこで大人から見れば、頗る常軌を逸した大膽な振舞と思はれるやうなことを平氣でやつて、自己を同輩の間に誇り得ることを最大の名譽として居る。其れがよし親や教師の怒りを買はうとも、仲間

との共同生活の規約に違背するやうなことなく、盲目的奴隸的に之に従ふ。是らの共同体は各人平等の共和政體ではなくて、其の間の首領株の勢力に全然動かされるものである。

かゝる時期にある兒童に對して、親や教師が無理解な暴君的取扱ひをしようものなら、益、反抗心を強めさせるだけで、親や教師の取らせようとする方向から逸れさせるに過ぎない。之に反して彼らの生活を理解し同情を有つて接するものには、無條件で悦服する。是らが青年前期の特徴である。故に徒らに干涉壓迫することなく、彼らの同輩となり相談相手となり指導者となつて、彼らに正しい方向を取らしめるやうに仕向けねばならない。

## 第二節 自己の發見

青年前期では、心の眼が内を向いて來ると言つても、未だ對象を明瞭に擲むことが出來ないのであるが、青年後期(十七歳位から)になると、自分に取つて價值あるものを臚氣ながら辨へて來て、他人の價值とするところと對立させ比較して考へ、幼少の頃のやうに親や教師の價值とすることを盲目的に信ずると言ふやうなことがなくなつて來る。即ちどこまでも思索的になり批判的になつて、親をも教師をも凡て此の醜された眼で觀るやうになるものである。

かく新たに自己を見出して來ると、其の價值を一般に認めさせようと言ふ要求が強くなつて來る。しかも此の要求は感情的で

あり強烈である。之が容姿にも態度にも現れて、髪かたちを整へたり身なりを氣にしたりするやうになる。のみならず其れが漲る力を放散させようとする生理的の衝動と合して、運動競技・乗馬・登山・旅行とあらゆる方面に活動し出して來るのを普通とする。

しかし價值を見出し自己を肯定する半面には、自らの空虚をも意識し自己を反省して、より高い所に引上げようと努力もするが、結局自己肯定と自己否定との間の矛盾に惱まれて煩悶懊惱を續けることになる。此の悩みは前期の頃のやうに盲目的皮相的のものではなくて、意識的でありしかも深刻である。従つて之が解決を學問や哲學や宗教に求めようとするものが出來、音樂・繪畫・詩歌・劇等の藝術に走らうとするものが出來る。しかも此の期の青年にあつては、一時的の情緒に動かされることなく、感情は永續的

な或る種の傾向をとつて来る。之を情操と言ふ。之が具體的には愛郷心や愛校心となり進んでは愛國心ともなる。抽象的には學問・道徳・藝術に對する良心となつて、眞理を愛し善を嘉し美を好むと言ふやうにもなる。科學的情操・道徳的情操・審美的情操と言はれるものが其れである。

かくて多くの青年は理想主義的となる。其れが嚮にも言つたやうに、感情的であるから、國家社會の問題などに對すると常に急進的であつて、自由を好み平等を希ふ。が他面また犠牲的沒我的な愛に燃ゆることも事實で、進んで他人の犠牲となり奮つて國家の難に趨くものである。しかし女兒は男兒に比して一般に保守的であり受容的であつて、さまで自由の要求は強くないが、やはり青年期の特徴として熱情的になり易い傾を有つものである。故

に親や教師は是ら青年の心理を十分に理解し同情して、彼らの正しき舵手となりより良き濬標かきくしとならねばならぬことは、前期に於けると同様である。親や教師の無理解な壓迫干涉は、前期に於けると異り、彼らをして意識的に反抗させることに役だつだけである。

## 第七章 社會教育の施設

社會の木鐸と言はれて、思想政治・經濟・産業教育・宗教・趣味に至るまで、社會大衆の指導機關として最も力のあるのは新聞である。新聞は單に其れに接する個人に影響を與へるだけでなく、實に輿論を造り輿論を指導する重大な役目を有つものであつて、たゞ社會の耳目をなすと言ふやうな皮相なものではない。であるから其の編輯の傾向、記事の内容等の如何によつては、社會教育上係はるところが甚大なものである。故に編輯者の高遠なる理想と卓越した識見と更に不斷の努力によつて、木鐸たるに恥ぢないものを發行するやうに力めると同時に、讀者も亦十分選擇して購讀し、

不良なものをして其の發行を續け得ないやうにし、兩方面から理想的なものとするやうにせねばならない。

雜誌も、新聞同様社會教育上重要な意義を有つものである。現在發行されて居る雜誌の種類は幾百あるか分らない。其の中には、俗悪なもの、低劣なもの、卑猥なものなどが非常に多く、徳性を傷け趣味性を害ふこと夥しい。之は讀者の好奇心と自然心に媚びて、單に賣らうとする爲の經營者の利己心がさうさせて居るのであらうが、一般に悪いことの暗示は善いことの暗示より一層強く響くものであるから、讀む者も讀ませる者も、十全の注意と反省とを必要とする。

兒童用の雜誌や其の他の刊行物に就いても、内容の適切でないもの、口繪や挿繪の高雅でないものなどが多いから、たゞ廣告だけ

に惑はされず、十分吟味し選擇して與へるやうにせねばならない。是らを一切青少年に與へまいとすることは不可能なことで、寧ろ適切なものを與へて指導する方が良い。

一般の知識欲・讀書欲・研究欲を充たし得るものとして、圖書館・博物館(教育博物館・市民博物館其の他)・動物園・植物園等の設備があり、講話會・講演會・市民大學・夏期大學等の施設が行はれ、大學擴張運動が實行される。就中圖書館は重要なもので、近來各地に普及しつつあるのは喜ばしいことである。圖書館はたゞ圖書を藏して閱覽させると言ふだけでなく、一般文化の動きを察知して、購求の圖書に選擇を加へ、研究者の相談相手となり指導者となり、更に學校と相俟つて積極的に地方文化興隆の中心となつて活動し得るやうに施設すべきである。我が國の國民は未だ十分に圖書館を利

用するまでに到つて居らぬのは遺憾である。

修養は個々別々に行ふことも大切であるが、其れと相俟つて社會的な施設によつて一層効果を擧げ得るものである。近頃全國到る所に青年團・處女會・婦人會其の他の修養團體がめざましいまでの發達を見せて來た。是らは單に形式に墮することなく、内容の充實を計るべきは勿論である。寺院や教會なども徒らなる儀式の末に走ることなく、民衆に呼びかけて修養の機關としての實を擧げ、生活の根元である信仰に培ふことに力を盡さねばなるまい。信者も亦宗教の本質以外のものに迷はぬやう心掛くべきである。

右の外音楽會・美術展覽會・演劇・寄席・活動寫眞・蓄音機・ラヂオなどは一般民衆に娛樂と慰安を與へ、趣味を助長し徳性を涵養するに

役だつものである。殊にテンポの速い現代生活に適應するものから、活動寫眞の普及は驚くべきほどで、従つて其の影響するところも頗る大である。それだけ危険も伴ふのは止むを得ない。殊に兒童にとつては、知識の教育にも情意の陶冶にも重要な意義を有つものであるから、映畫の選擇を誤つて、感情を低劣にし不良な行爲の暗示になるやうなことの無いやうに注意せねばならない。故に常に兒童の發達に留意して映畫の内容を吟味し、説明の方法を適切にし且つ映寫の時間を加減して、教育上遺憾のないやうにすることが大切である。

地方に發達して來た民謡は、歌詞も歌曲も其の郷土の自然と人情との所産で、美しい地方色の表現である。しかし歌詞には往々一般風教の上から觀て、どうかと思はれるやうな卑俗淫猥なもの

もある。是らは漸次改良を加へて、國民性向上の資料とすべきであらう。

民衆一般の健康は國民元氣の係はるところであるから、其の向上に就いては爲政者は勿論社會一般に此の點に意を用ひねばならない。此の頃民衆の身體修練の爲に、學校運動場の開放や公開運動場の設けられるのは欣びに堪へない。殊に最近運動競技が一般に普及し、社會の人々が之に興味を覺え、進んで之に参加するやうになつて來た。神宮競技會やオリムピック大會などを始めとして、各種の大小競技會が催され、男子ばかりでなく、女子の間にも漸次盛になりつゝある有様である。しかし未だ先進諸外國に比して一段と努力せねばならぬものがあらう。

なほ登山・スキー・キャンプなど年を追つて盛になりつゝあ

るのも、國民の身體鍛鍊上資するところが多いであらう。

社會教育の必要から、文部省は大正九年五月各府縣に通牒を發して、其の事務を擔當する主任吏員の特設を獎勵した。社會教育主事が其れである。社會教育主事は、通俗教育、補習教育、青年團、處女會等に關する事項、生活改善、思想善導等各般の社會事業に當り相當成績を擧げて居る。しかし要するに國民一般の自覺に訴へて、自彊自育各自自ら向上の一路を辿るやうになることを理想として指導すべきであらう。

## 第八章 母としての自覺

昔から「氏より育ち」と言つて、兒童を取り卷く環境が其の教育に重要な意味を有つことを教へて居る。勿論人間には矯正することの極めて困難な天稟の素質もあるが、如何なる素質も潜在的な力として存在するだけで、其れが環境の觸發によつて現れるものであるから、環境が異れば従つて其の性格にも變化を及ぼして來ることになる。此の意味で環境は人を造るとも考へられる。其の環境中で兒童に直接影響のあるのは、家庭の境遇、交友の種類、學校の教育、社會の事情などである。殊に家庭が其の基礎をなすものであることは繰返し述べたところである。



諸種の文化に對する家庭の人の態度は、善きにつけ悪しきにつけ、其の子の方向を決定する。一家揃つて家事に勤しむ家庭からは勤勉な子を出し、共々に趣味に生きる家庭からは高尚な子を出す。家庭の人が勉強することなしに、兒童にだけ勉強を強ひても効果はない。丁度蟹の親が其の子に縦に歩むことを強ひると一般である。獨逸のザルツマンの著「蟹の小木」一名不合理な兒童教育法一七八〇年初版の中に、「父のステフェンの嘘つきなのを見習つた其の子が、學校が嫌ひなので、『今日、學校へ行くのは厭だ。昨日學校を休んだので、今日は先生に笞で打たれるに相違ないから。』と言つて父を欺いた。ところがステフェンは『馬鹿だなお前は、昨日は少々下痢をしたのでとか、お父さんのお使ひで遠方へ行つたのでとか言へば差支へないぢやないか。』どうだ旨いだらう。」とまた

虚言を教へる。かくして其の子は益、嘘つきになつて行く。』と言ふやうな意味のことを書いた一節がある。心すべきことではないか。すべて人間は、知る者の間にあつてのみ知ることを覺り、行ふ者の間にあつてのみ行ふことを覺え、感ずる者の間にあつてのみ感ずることを教へられるものであることを知らねばならぬ。

家庭にあつて兒童の教養上最も重要な地位にあるものは母である。何れの家庭でも父は多く外に活動するもので、絶えず兒童に接して居るのは母親であるから、家庭に於ける兒童の教育は、かつて母の責任にあると言つても過言ではない。事實兒童に對する仕向け方は其の子の運命を左右する。正行の母にしても、時頼の母松下禪尼にしても、中江藤樹の母にしても、或は支那に於ける孟子の母にしても、古來英雄や偉人を出した家庭は、殆ど其の母

が賢母であつたやうである。これらの歴史に徴するも、教育上母の感化の如何に偉大であるかが窺はれよう。

母の感化は、其の子との間に互に流通する強い愛情のうちに極めてなだらかに行はれる。母親から溢れ出て其の子に注ぐ自然の愛は、燒野の雉、夜の鶴、舐犢の愛、乳虎の怒などと言つて、何にもまして強いものである。しかし之は自然的であるだけまた盲目的なものである。時に之が兒童を害ふ溺愛ともなる。眞の愛情は、理知に導かれねばならない。其れは單に自然的な愛ではなくて、互に人間の理想を現し人格を造ると言ふことに基礎を置いた本當の結びつきでなければならぬ。之を母の方から言へば兒童を眞の人間にしようとする慈愛であり、子の方から言へば眞の人間となつて親を安んじようとする孝行である。かゝる愛は一時

的利那的ではなくて、永遠不朽である。此の愛が教育の基礎をなす。教育とは自然の愛の上に眞の愛を築き上げることである。此の意味で、愛は教育の本であり愛によつてのみ教育が成立つのである。

かう考へて來ると、眞の愛は、兒童の人格を造る爲のものであるから、決して彼らを甘やかすことではない。教育者としての母は神の尊嚴を代表するものであつて、兒童に對しては權威をもつて臨まねばならない。しかし其の權威は兒童を威壓する外形的のものではなく、自らの義務を行ひ道徳を實行することによつて内から閃く光でなければならぬ。かくて善良なる母は親しむべく、侵すべからざる愛と敬との對象となる。其の爲には母であると同時に、人間としての修養を怠つてはならない。殊に兒童と共

に考へ兒童と共に感じ兒童と共に行ふこと——兒童と共に生活する態度が肝要である。之によつて兒童に「やらうと言ふ氣」を起させて自ら活動させることが出来るだけでなく、兒童の心を如實に理解することに役だつからである。兒童の心を理解し得ない女性は母たるの資格がない。相手を理解し得ないものの愛は、單なる動物の愛である。眞に理解し得て始めて眞に愛することが出来る。眞に兒童を愛する母親は、どんな事があつても、其の子に對して人格上の非難をしたり嘲笑したりすることは無い。よし母親は知識の點では其の子に劣るやうになることがあつても、兒童を理解し兒童を信じて、濫い感情で之を包むことによつて永久に其の子に慕はれる。母が理解し得ない時、其の子は母を離れて再び母の懷に返ることは難しい。かやうなことは單に想像する

だけでも身の毛のよだつ思ひがする。

母は常に子を愛することによつて人として生き得る。子はまた其れによつて人として成長する。母は實に神によつて恵まれた自然的の教師である。此の自然的な教師としての任務の自覺を本として、偉大な愛を築き上げるところに、母の價值があり偉大さがあり尊さがある。「女は弱し、されど母は強し」と言つた人があるが、母性の強さは一切の社會的結合の基礎をなす愛を生むところにある。

# 近代女子教育學 終

昭和五年九月十五日印刷  
昭和五年九月廿一日發行

【定價 金三十七錢】

近代  
學育教子女

著者

佐藤熊治郎

發行者

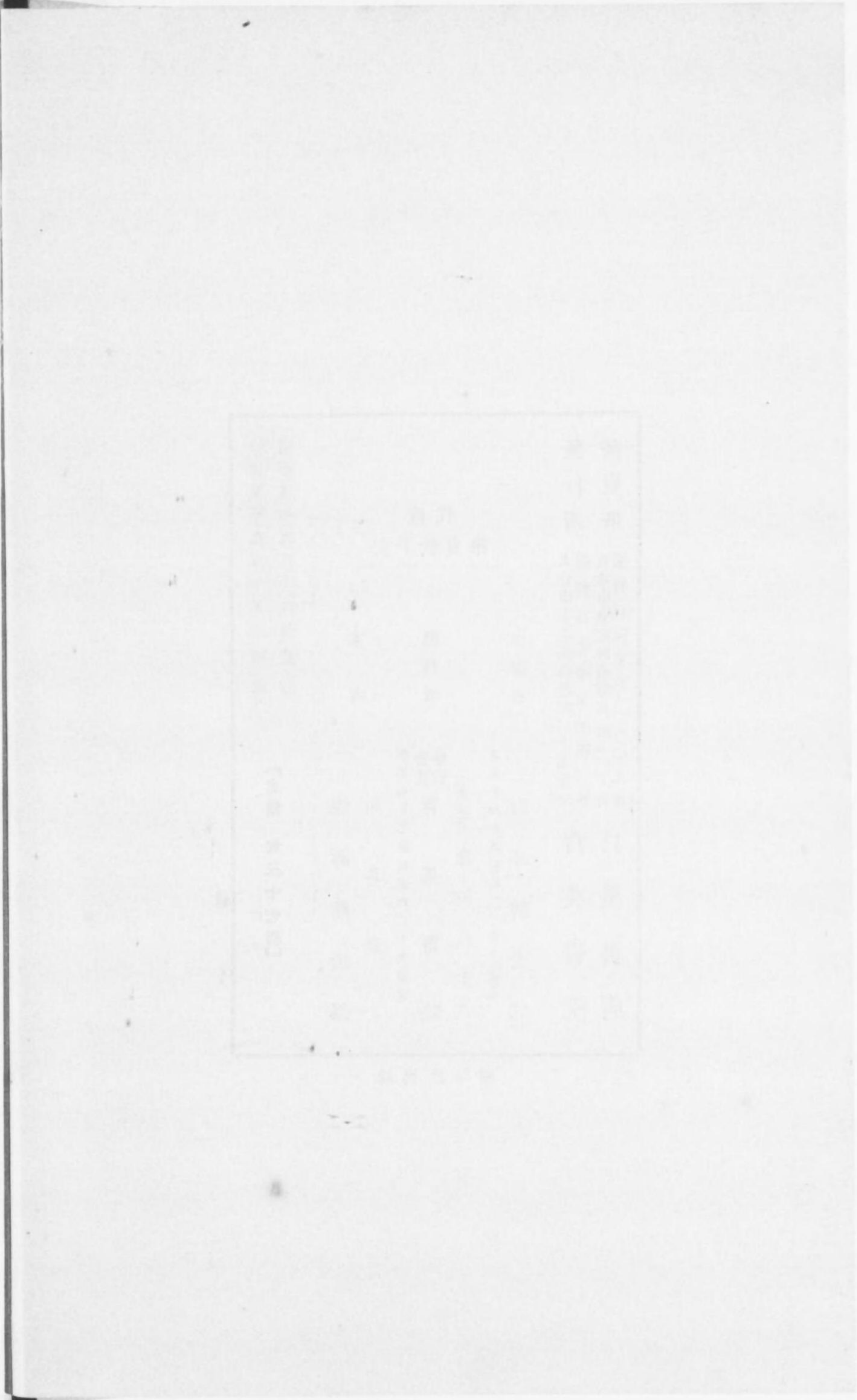
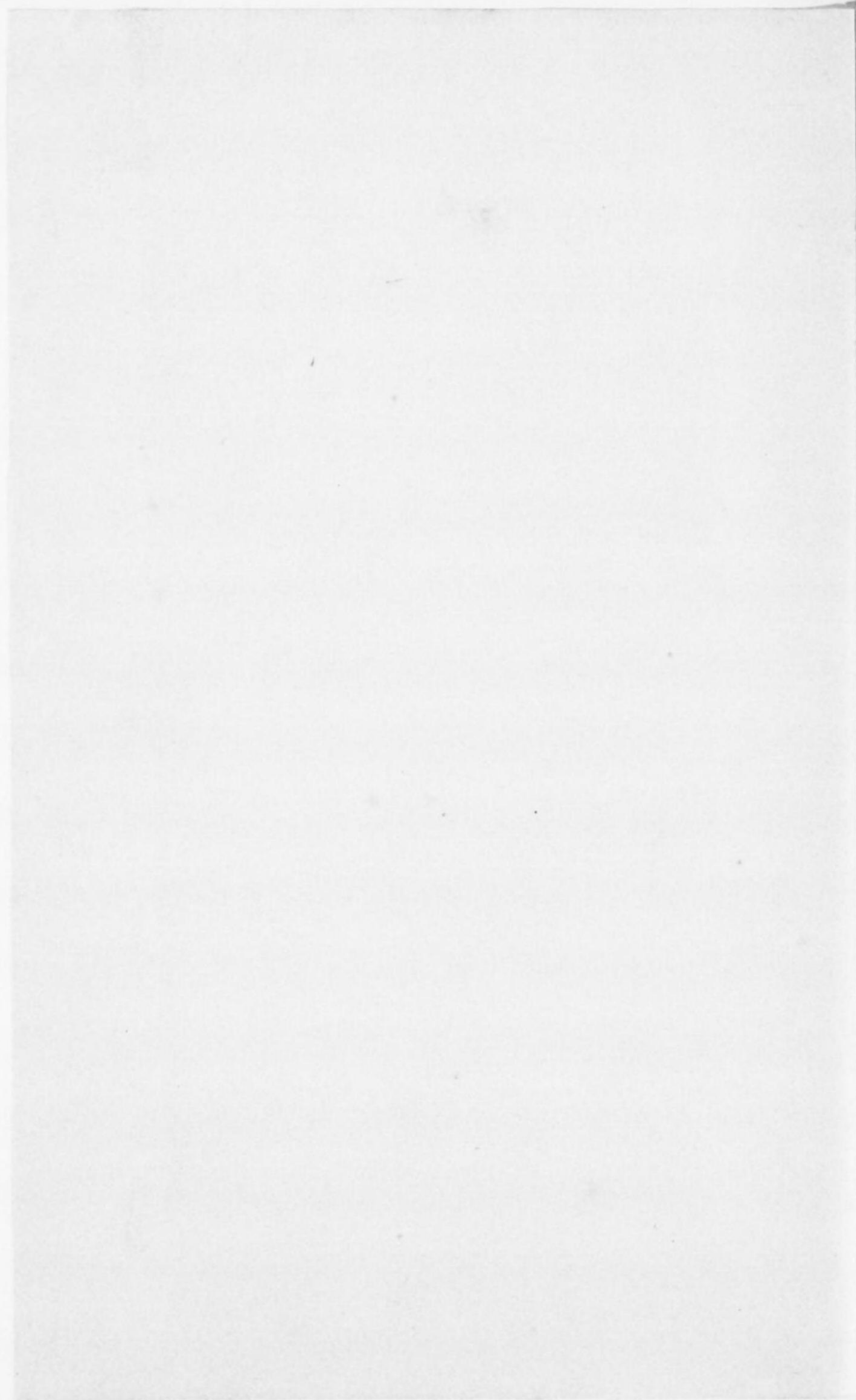
東京市牛込區白銀町二十九番地  
合資會社 英書院

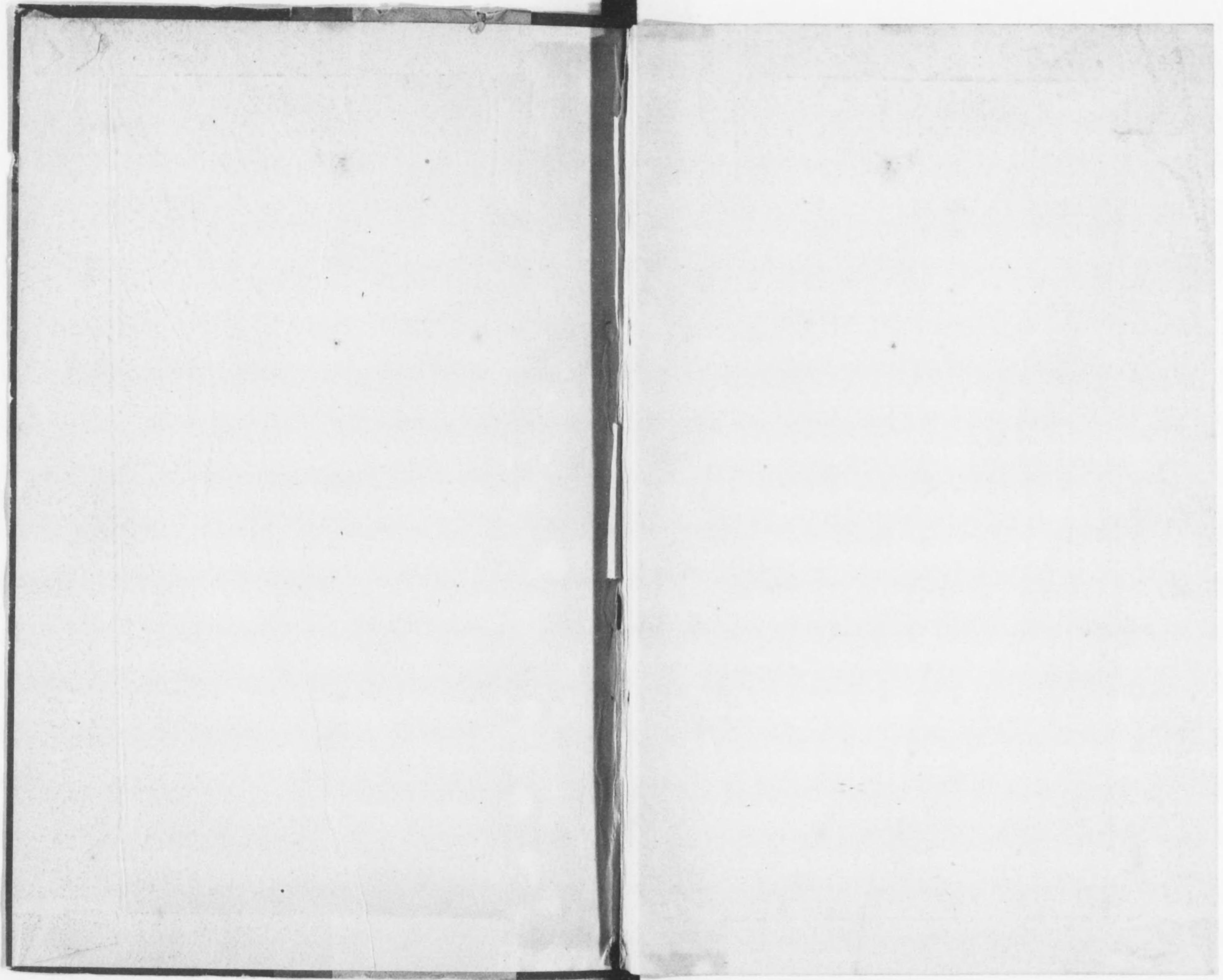
印刷者

右代表者 倉田八十八  
東京市神田區錦町三丁目十七番地  
白井赫太郎

發行所 東京市牛込區白銀町二十九番地  
發賣所 振替口座東京二八〇九番  
育英書院  
目黒書店

精興社印刷





終